

あさ

創刊号

特集 おやかたさま



43-3 春季号

みはらこひむすう
とくめなるこ
わさわさ
よこちん
し



竹
松
文
画

四君子の図

おやかたさま彩管



喜



金婚式をお迎へになった天村先生
とおやかたさま

—左 若き頃のご夫妻



目次
あさ創刊号

巻頭言
|| あさ創刊によせて ||
松木天村 5

天人女史語録

6

特集 おやかたさま

おやかたさまと新しい道 矢野誠一 8
西大寺のおやかたさま 菅原茂次郎 11

〈随想〉 紫陽花 森下邦堂 30

おやかさまを載いて

暗香浮動 月黄昏 林盛道 41



大器晩成に鞭あてて

吉田英二 45

おやかたさまの微笑み

木村 保 47

救いと心

矢野誠一 50

新しい道を志向する世界の宗教界

櫻木健古 54

隨筆

出 会 い

西 三 郎 67

人生はすばらしいもの

和田篤子 68

訪問記

（京都―森下邦堂氏・奈良―山本貫二郎氏）
（西大寺―森田元治郎夫妻・芦屋―池田夫人）

編 集 部 22

松風録

（昭和四十二年一月二十日の松の間より）

編 集 部 31

輪

（平井谷本部委員を囲んで青年部勉強会）

編 集 部 58

※表紙・高砂入形（松箱閣蔵） ●作者・小原緋左 ●撮影・松木天村

※カット文字・甬田鶴川・絵・小野佳二

松 籟 閣

昭和41年12月竣工
おやかたさまご一家のお住居



南面からのぞむ松籟閣



二階ベランダより金剛山をのぞむ

建築面積320㎡、延面積500㎡
鉄筋コンクリート、外面木工法に做った2階建の此の建物は、孟宗竹を植込んだ2層吹抜の中庭を繞り、コンクリートの素地と白壁を基調としている。環境との調和を図った正面、南縁は光悦垣をめぐらした石庭に続き、四辺丘陵の松林の風景は自然の池を通して遠く拡り、遙か東南方は葛城、金剛、二上山をのぞみ、まことに得難い一幅の名画をなしている。

天竺卷

朝

|| 創刊に寄せる ||

松 木 天 村

さあ

さあくくくと 口をついて出る自然の音は 無限から成って来る
物事初発の天の合図ではあるまいか

されば この音を文字にする時とつきとうか 朝と書く

さあ——さあくくあさは一つの生命が具象化する天の時を示す
それ 朝の太陽 太陽は 無限の闇から成って来る

その日の最も新鮮な存在と同時に 最も古い久遠の存在である
天人女史の指向する「新しい道」は最も古い日本民族の道統を
現代に新しく熨斗出さしめる 天意現成の人づくり国づくり

朝の太陽の道である

|| 昭和戊申之春 於 松籟閣 ||

國があるから自分がある

二或る青年へのご垂示二

さ、お前さん、こういう処から、ひと言、申します。

日本にっぽんの国、有難いものなんえ、さあさ、国がある、国があるよつてにな、俺らも、居がられるんじやろうえ、ここな思しいようじや、さ、なるほど、く、合が点てんしいや。

国じゆう、国うち、さあ、こう申す、まあまあ、国に、国が、おう、く、こないに言うだろう、そんなら、お前さん、国だく、国々々、国がくくと、そういうふうに、言いわれることを、嫌きらだなあとも、おかしいなあとも、不思議ふしぎだなあとも、今、思しうておらんだろう。

さ、そこなんじや、それでこそ、まともなんじや、真直まぢぐなんじや、上じやう々じやうなんじや、さ、さ、あ、まあ、く、この国じや、く、この国有難いい、く、有難いいんじや、く、本ほん当たうに有難いいんじや。

けんど、その国が、今、濁にごつちよるんじやわい、さ、これ、気がつくだろう、あ、まあ、有難いい国が、濁にごつちよるんじやでな、国内こく内が、濁にごつちよるんじやでな、さ、それさえ、気がついて、く、これはな、やつぱりな、なかにな、住すもうちよる、われく、に、よつちよるが、それを知るんじや、ああ、そうじや、く、そこで、さ、さ、やつぱり、中味ちみじやわい、中味ちみが肝かん甚じんじやで、そう、く、そこなんじや。

さ、お前さん、今から言う、よう受けや、お前さんの中味ちみはな、真白ましろじやでな、あ、まあ、無垢むこじやでな、何でも、かんでも、その白しろいところに、国くにという理りを、のす、その国くにという理りが、その、真白ましろい処ところに、一寸、のりましたんや。

あ、まあ、お前さん、よかつたな、それがな、お前さん、さ、さ、ごっしょ、ごっしょに、なつてからではな、国くにという理りは、うつとも、すつとも、なりませんのやで、さ、お前さん、それを、知しつたかえ。

そんなら、お前さん、又言うで、今が今、今が今、今、今、今、この今が、大事やで、今を大事
と思うんやで、いつも、今の事に、一生懸命なんでもしてや、これ、肝甚やで、今に、
今を、今が、あたま、今があるからじやでな。

さ、さ、今を、そこそこにしたら、あかんのじや、さ、さ、そんなら、お前、物事一切、その事に、
さ、さ、絶対、そう思うんやで、さ、それで有難い、さ、お前さん、それに一生懸命、
無心じやわいな、おい、どうじや、すべてがすべて、無心であれ、無心とは、あたま、今の事ほか、
何にも、ござらんやで、そうだろう、ほら、そのとうり、今の事、その事だけしか、何にもないわ
いな、それ、無心と申すわいな。

そしたらな、浮世ではな、こじや、これをしながら、あれをこう、あれもあれにも、あつち
にも、なんか、かんに、お色気がある。これは、無心ではないわいな、駄目じや、そな
いなものが、おおかたじや。

物事一切、その折には、無心であれ、あたま、無じや、さ、無とはな、おい、俺はないん
じや、自分はないんじや、自分はいらんじや、自分があつたら、あかんのじや、自分はない、
、自分は、ちゃんと、そこで見ておる、そこが見ておる、そこが知っておる、だか
ら、われの思い、自分はいらん、それで、お前さん、まあ、ああ、さあ、いいな、これだ
けを、教えましたえ。

言うで、若い者、若いうちに、免角、自分を忘れてしまふ、自分を知らんじや、そうして
おるとな、ちゃんと、自分のおへそがな、いい塩梅に、お前を持ち上げるんじやわいな、そういう
ような、筋あいじやでな、さ、今晚、これを、お前に教えましたでな、ええわいな、ええ氣じや、
ええお方じや、さ、お前さん、ちようど、白無垢じやつたでな、その白無垢に、国という、その理
を、ちよんと、嵌めましたんやでな、はい、こんだけ。

(昭和43年2月24日神戸、近藤徹氏(二十四才)に対する「紫の間」三巻示テープレコードより抄)

特集 おやかたさま

おやかたさまと新しい道

理と法

浪華の地、それは此の国の最も尊い所、天がめつこを入
れ賜うた一番めんこい（可愛い）、土地、それ丈に、こ
に住む人には、天からの物凄い注文があるという。その浪
華の南郊羽曳野の一角に、新しい道の場がある。新しい道
というのは、今の世の人の知らない、最も新しい、しかも、
最も古い神ながらの道である。そして、おやかたさまお一
人からなつた道である。天人まつきそうえん女史、このお
方様を、我々道のもの、かくお呼び申し上げている。お
やかたさまこそは、現代における、最も新しい惟神の一番

の初手である。だから此の道は、おやかたさま以外、未だ
曾って誰も歩んだことのない、夜道であり、裏道である。

道というものは続かねばならない。ぶつ切り切れる横道や
路地は本道の道とはいえない。此の道は、どこまでも続く
大道であり、真直ぐに通らねばならない本道である。人
じかに天に引き上げるべく、天から地に敷かれた天道であ
り、男の男が通る道である。

新しい道の根本は、理というものを措いて他にない。お
やかたさまのお通りになつた過去は、理そのものであり、
理の雛型である。それ故、此の道を、雛型の道ともい、
又、理の道ともいう。

理とはなるものであり、凡てがなつて来た、そも、もとである。人が之なくしては一時も生きることの出来ない、最も高くして、最も尊いものである。

機を織るには、先づ、縦糸をわたしてからでないかと、横糸は通せない。理は、縦糸のように、縦の筋であつて、横糸のように、横の筋に当るものを、法という。だから、理は法に先立つものであり、理あつての法である。

そして、理とは、目に見えぬ世界であり、法とは、形に見える世界である、と一応いえよう。理とは、立つものであり、又、立てるものである。此の道に於て、理を立てるといふことの根本の意味は、おやかたさまを第一にお立て申し上げ、おやかたさまに全託する。といふことである。

そうすることによつて、我々の理が立つのである。一人の女性をお立てすることが、何故理を立てることになるのか、不思議にお思ひの方もあらう。一口でいえば、おやかたさまそのものが理でおありになるからである。そして、理が立つてこそ、自然に、おやかたさまから、法を授かるのである。それは、おやかたさまが理を通りきられたからこそ、求めずして、知らない内に、溢れる程の法をお授かりになつたからである。この道では、理が立つてこそ身が立つ、という。今の世は、理を忘れて、法に憧れ、法のみを求め、凡てを法によつてのみ価値づけ、判断しようとする。凡てが錯

倒する根本原因が此所にある。理法は均衡、協調すべきもの、理と法の組合わせこそが本当のものである。

此の道は、あくまで理を根本とするけれども、理のみではなく、理から自づとなつた法がある。かゝる理法兼ね備えた道は、此の道を措いて外にないのである。

場

場というのは、おやかたさまを戴く所であつて、此の国にやがて越すに越せない、往くに往けない日があるが故に、その時に備えて、天がおやかたさまのお徳によつてしつらえられた場所である。だから、場はおやかたさまをお立てしなければ、その存在の意義を失うのである。おやかたさまは場の芯であり、めどうである。そして、場は国助けのもとであり、天からの申しものである。天意は此の国の此の場のみにある。天の御業のなすが尽に任すのが場であり、場には天徳が溢れに溢れている。

我々には我々を生んで呉れた親がある。その親には又親がある。その又親にも親がある。かくして、おや！おや！おや！おや！……と辿って行けば、遂には、抑々我々人類のみたまなるものを生んで下さつた一番の元親に達する。之がみたまの親様であり、理のもとである。そのみたまの親様が、芥子粒よりもまだ小さくなくて、そのみへそのと

ん奥に潜んでおいでになるのが、おやかたさまである。

最も尊いものは音（声・肥）である。その音は、息のものとである。またまから頂戴する。場は、おやかたさまの音の吹まの音のなり場所であり、こ、からおやかたさまが理を吹きまくられる所である。我々の側からいえば、その音（声・肥）を、我々のみたまの肥として天から頂戴する所であり、値を支払って、その理を買いに来る所である。理とは買うものである。而して又、理とは苦である。苦を苦とせずして苦をすることである。此の場は頭（智恵）丈では分らない。世にも不思議な、苦買いの場所である。場は又、業因を払拭して、人を身ぐるみ仕上げて助かりきらす所であり、此の道を知った凡ての者の果し場である。果すというのは、義務を果す、使い果す、などという場合の果すと同じで、有形無形を問わず、あつたものを、多かれ少なかれ、なくすることである。

場は人によってなる。而して、天の御業のなすが尽に任す場であるならば、此の道に繋がるものは、はいはいで、凡てを天に委ねる大阿保でなければならぬ。

場の本義は通る理にある。通るとは踏み行く謂いである。おやかたさまを御立て申し上げる、値を支払って理を贖う、凡てを天に委ねる、果す、等々何れも通る理に外ならない。

おやかたさまと場と人と、之を称して三つの理という。

果しの理

理は万々々筋あるという。そして、理とは通るものであり、通った丈しか分らないものである。即ち、理は体感しなければならぬものである。おやかたさまのお通りになつた理は万筋であり、我々の通つた理はもの、数にも入らない。おやかたさまを本當に存じ上げるには、そのお通りになつた足跡をその通り歩むの外ないが、それは我々にとつて到底不可能である。だから、正直の所、我々にはおやかたさまのことが、本當にはわからないのである。わからないものが、わからないおやかたさまのことについて曲りなりにも語らねばならないのは、我々おやかたさまのお仕込みを受けたものは、どうしても、此のお方様を世にお出ししなければならぬ義務があるからである。義務というよりは、お出ししなければ止まらない当然の理があるからである。之も我々の果しの一つなのである。

如何なる言葉や文章を以てしても、偉大なおやかたさまの片鱗だにも伝えることはできないが、おやかたさまの御存在を一人でも多くの方が御存知になり、本當は国内の凡ての人が御知りになる義務がおありになるのであるが、此の場に果そうというお方が一人でも多くなることが切望されるのである。

矢野誠一著、天人女史とその場、より

西大寺のおやかたさま

菅原茂次郎

安からぬ日々

大和は国のまほろばたなづく青垣山

こもれる大和し美わし



森田邸前の露路

大和はなつかしい名である。

ここに遊ぶ私どもには母の懐を思わせる安らぎを感じさせる。

京都東山清閑寺の住居を追わ

れて奈良の西大寺の茅屋に逼塞しているおやかたさまにあっては心安からぬ日々であった。今日も又しても清閑寺時代を思いかえしていた。

……毎日淋しい時には山に行き、チンチロを拾い喜んで

駆け足で帰った事もある。手に茨を受けて平気で山を歩いてこけた事もあった。何時も鉢を持って山に行き、手ごろな花木を頂いて、自然を写して床に生けたものであった。東山は夜になると人通りも稀で、お花を教えて帰りが遅くなる時は淋しかった。大声を張りあげて小さい時覚えた唱歌を歌って帰ったっけ。

二十五年の正月五日だった。夕餉の仕度の時転んで三メートルの崖から真つ逆さに落ちた。石段をよけて一坪位の土の上に脳天をずしんと打った。奇蹟的に大した怪我もなかった。今思うても不思議である。早速横須賀のお父さんに様子を知らせ御話をのべ、仲のよいお友達を招んで披露して喜んで貰った。それから四月頃だった。急に喉にえずくものがあったので、驚いて回虫が上から出るのだと思って、緑先で指を口に入れて見たが虫ではなかった。あの頃から脇が替ってきた。

そう／＼ジーン台風の時、二階の天井が一坪ほど土

と一緒に落ちて来た。娘と二人で取り片付けて近所の人に直して貰った。天村が上京して留守だったが平気であった。

十一月に突然家の明け渡しをせがまれた。家主が暴力団みたいな者に無断で家を売ってしまったのである。掛け合ったが交渉は決裂した。台所にたらい。大の穴をあけ嫌がらせをするので、涙金で引越したが、何と云っても口惜しい。

小坂の友達が家の二階があいているから、お出でなさいと誘ってくれたが、中途半端なことは嫌で落ちるなら底までと、奈良西大寺の農家の奥の草屋を借り受けた。それは六畳と四畳半（板の間）の家で、押入れ一つもない家であった。何かの時の控部屋らしい。棟つづきに鶏が飼ってあり、米搗場の土間がある。そこに石炭箱を置いて七輪をのせた。十二月十九日ここに移り来たのであるが家の事は覚悟の上だったが、便所がないのに気付かなかった。気がついた時には驚いた。門の横にある大きな集みたいなのを教えられ泣いてしまった。

暮に立退料を持って、正月の買物をしようと大阪へ出かけた。上六に来たら懐にお金がない。娘も頸飾りをなくした。天村は五衛門風呂で胸を打った。一家は徹底的にそがれたのである。

昭和二十三年から宇治の黄檗や小坂にお茶とお花の稽古場を持ち、通いつづけていたのであるが、清閑寺の住居を

追われた不快から憂悶を深くし、遂に寝こみ、出稽古をやめた。

或る日大家で「生長の家」の新聞を見付けた。それに有難う御座いますと千遍云うて、思いが替った記事を読んだ。いいことを聞くとすぐ実行しないと気がすまない。早速人絹の糸を切つて千本作りこれを数え、有難とうを毎日繰り返した。

心の影

大和の春はまだ浅い。夜はさすがに冷える。この家は雨戸もなく障子だけである。夜も更け、深閑として物音一つしない。おやかたさまはさつきから机に向つて一心に何か書き続けていた。

昭和二十六年二月二十四日夜十二時半、この気持を忘れぬ様に、自分の反省の為に、宥子記すと認めた。そして筆をおいて読み返した。

「お正月の十三日日本年初めてのお稽古日であった。この日は殊に冷めたかった。電車の中で釣り皮を持つ手が凍てつきそう、何度も持ちかえた。お腹のままで凍みつきそうな寒さを感じた。お稽古場へいっても、前後に懐炉を入れても、ガタ／＼震えていて、一日中羽織を脱ぐ事ができ

なかった。その夜十時頃帰って風呂にも入った。温かくして床に就いたが、翌日からお腹の調子が悪くなった。何時も二日位でよくなるのに、それから下腹部がおもく、痛いところがちよい／＼出てきた。何となく不安で、自分の身に自信がもてなくなってきた。十九日小坂、二十一日黄檗へ行つた。西大寺の駅で二十分も電車を待った時は苦しかつた。

二十二日の朝起きたら下腹部が大きく脹らんで来たので往年の腹膜が再発したのかとが、かりした。今年はずよつと長引くと自分でも観念した。この日より湿布をした。その上に懐炉を入れた。安静にして寝ていなければいけない。背骨が痛い腰筋が痛い、五体が全部痛むので、寝返りに苦しむ。毎日起居動作にさえ悩まされていた弊も、二三日続けて寝ていたら、あたりまえの事とは自分で知っていたけれど、つく／＼と悲しくなつて幾朝も泣いた。……

寝ていると／＼な事を頭に描く。いやな事ばかり先にたつ。夫の事業のこと、佳子の結婚や就職や、又自分の将来の事など……私は何もかも夫の事業について取り越し苦労が先に立つ。そしてそれを口に出しては夫を怒らしている。その夫の嫌な気持が、折角の熱心な活動を阻害している。お金の問題も今これを使つたら、あと今度はどうなるのかと、もう先が心配になる。皆私の迷いであつた。……

……私自身としても、自分が年がたって動けない弊になつたら困る、佳子に嫌われるとか、佳子を嫁にやつたら淋しくなつて困るとか、いろ／＼あまり先を考え過ぎて、何でも自分の生涯の仕事に身に着けておこうと、無理を知りつ、あまり頑張りすぎる。……私が寝るのはよく／＼で、いざ寝たら一度に痛いところが出る。今日はよいという日がない。もう一ヶ月以上になるのに、どうしても歩く事が大儀である。

いやな事ばかり考えて困る。今この家で、自分が起きられなくなつたら、松木家はおしまいの様な気がして、どうしても起きようと思ふけど、お腹の痛みがとれないのが気持ちわるいが、もう十日ほど前からいろ／＼と反省していると、自分がこうなるのも昨年のうちから種を播いていた事がはつきりした。

清閑寺にいた時に、沢田の家を追われて以来、何ヶ月も胸にかたまりが出来て、どうしても落ちつけなかつた。家に帰ると座つていても、それが浮き腰のようだった。その時自分は恐怖症にかかつていたと思うた。

十二月始めこの家へ来る事がきまつて、そのかたまりはとれたけど、その時までには、私の今日あるのを分つていたのだらう。十二月廿日にこの家に仮住居をしたけれど、それからというものは、毎日／＼佳子と二人で、家の不足、

夫をつかまえては身の不幸を語った。感謝の念など露ほども出ぬ。朝から泣き度いほど嫌な日を毎日過して来た。それに佳子の就職についての悩み、しばらくは地獄であった。夫に對して不足が何時も先に立つ。こんな事では一家を滅ぼして行くことを悟る。有難いと、やれ／＼救われた事を感謝している。

肉体も環境もすべて心の影、ほんとうにその通りで、幾日も幾日も天井を見守りながら、感謝の言葉を見出して、心から喜ぶことが出来たことは本当に嬉しい。

何事も神さまのみむねのまま、私も生かされているのだから、自然のままに逆らはない事に、心を長閑に持つことにした。何を見ても、何を聞いても、有難うと思えるようになったこと、一生懸命つとめている、悟り得て有難い。

合掌

零 落

日の丸運動が挫折した天村先生は、上京してたま／＼大和道の高橋伸典氏に遇い、「本当の旗挙げはこれからだ」と勵まされた。これに感激して先生は二十六年初から大和道に下座することになった。おやかたさまも半年位したら上京する手筈になっていた。小坂、黄檗の稽古も断わり上京の

準備をしていたら、八大龍王のお台である森麿子が、

「大和道に黒雲が立ちこめている。伸典をこちらに呼べ」との神言で上京を中止することになった。

小坂からはお稽古をまたやって貰いたいというて来たが、送別会をやって貰い、餞別まで戴いたのに、上京を中止したからとて、又のこ／＼行く訳にはいかない。

伸典氏は先生の手当を寄こすと約束されたのに送ってこない。おやかたさまは伸典氏へ手紙を送った。それに対して「因縁ならば通らにやならん。通って果さにやならん。松木君は僕のところで過去一切を清算しているのだ。そういう夫をもつのも因縁だ」と云うて来た。おやかた様はハタと膝を打つてうなづいた。

昔の知り合いの畑中の世話で、大阪南の新年月（料亭）に花生けを頼みに行った。おかみは、

「折角だが戦争未亡人が前から来て呉れているんで……と断わられた。その時、

「縫物はありませんか」

とおやかたさまの口からフト出た。

「それなら沢山あります」

と、出して来たのが縮緬ものばかりであった。フトしたことからおやかたさまは思いもかけない縫物の内職をするようになった。着物を縫える弊ではなかったがよく／＼の

心定めだろう。新花月のおかみはよい人で「奥さんの縫ったものには誠がある」と喜んでくれた。

約束の半歳になったが森田の家を出るあてもない。おやかたさまは気がねして、豆叩きをしたり、五葉の松の枯葉を取ったりして大家の手助けをした。森田のおばあさんはおやかたさまに親切にしてくれ、餅をくれたり、焚物を七輪のそばにおいてくれた。森田の干物を見ると皆木綿である。おやかたさまは絹物を着ているのでおばあさんが、

「姉さん（おやかたさま）木綿を着なはれ」と云われるが、木綿の着物は持ってもいないし、買う金もない。食べるものも削っているが、肴はおやかたさまのところが多く買った。これも森田へ気兼ねであった。

六畳に上敷を敷いていたが、破れて足が引っかかるのでおやかたさまは、風呂敷の茶色のを探して、畳の縁を作って「足が引っかからないのでいいでしょう」と自慢されるのであった。七輪で焦したところも縁を作って繕った。

その頃食べることが精一杯であった。お嬢さんの弁当にはお米を入れたが、おやかたさまは薩摩芋にジャコを入れて煮て食べた。おやかたさまの下駄は桐でないと重くて履けなかったが百円以下では買えない。おやかたさまは下駄を裏返して、鉈で切り揃えてタイヤを張って履いた。

森田の家には俊ちゃんと言う子供がいた。はじめ可愛が

ったが、あとでこの子の為に家をもめるので困った。パンを食べているところへ入ってくるとやった。すると家に帰ってパンをねだる。牛乳を取って行って飲んで池に棄てたりする。あまり可愛がってもいけないと思った。

三輪への手引き

静岡県の吉原に大和道で知り合った森氏がおる。天村先生は奈良の行き帰りによく立寄った。ある時夕食がすむと奥の部屋から祝詞のりとをあげる女の美しい声が聞える。それが奥さんの慶子さんである。先生はその部屋に入って、後に坐っていたら、般若心経か何かの経本を投げて合掌して、「天村初対面であるぞ、神は一つであることを教える、三輪に参れ」と云われた。

彼女の語るところによると、里が大和の郡山で、若い時躰が弱かったので、爾来三輪を拝んでいた。そのうち八大龍王のお台さんにされたと云うのである。この次第を掃奈しておやかたさまにお話しされたら「私は一度も行った事がないから一緒に参り度い」と云うので同道した。

大神神社は日本最古の大社で、古くは大神大物主神社おみちのおみぬしといい、また三輪明神ともいい、大和一ノ宮としてあがめら

神秘の始め

れている。三諸山^{みじろ}を神体山としており、別に神殿はなく、正面に鳥居を立て、その前に拝殿があるばかりである。

拝殿にぬかついた。「三輪にこい」といわれたから、何かあるかと内心期待したが別に何事も無い。

折角来たのだから官司に会おうと、社務所に廻り、大和道の名刺を通じた。中山官司とは初対面である。

「昨日帰って来たところですよ。二三日前、東からえらい人が来ると知らされた。貴方でしたか」

と、意外なことを云われ、先生御夫妻は吃驚して顔を見合わせた。官司から神社の縁起を聞き帰ろうとしたら、お昼の用意が出来ているからと、別室で大接待を受けた。失礼しようとしたら、沢山お土産をくれ、正式参拝しましよと云うのである。玉串料も持っていないし、気がひけたが官司について正式参拝した、拝札をすませて右手に廻り三つの鳥居の話聞いていたら、先生の唇は紫色にかわり、ふる／＼震えている。三輪さんが乗ったのである。

天村先生は神縁がなかなかで、友人の福井弁護士^{ふくい}の夫人、この人が伏見稲荷の熊鷹さんのお台で、彼女から八大龍王の像を買った。これから色々な神秘が起り、この二人に一年近く引き廻わされた。

森慶子は加持によって病気を治した。誰の病気も一週間とか、二週間とか日切りを云う。それが又奇妙に治るのである。しかしおやかたさまとお嬢さんには、それが云えないのである。西大寺の狭い家に一週間も泊ることがある。お飯を七杯も喰べるので、おやかたさまは芋ばかり喰わなければならなかった。森は神懸りして、「天村この女に水をむけや……道場を京都方面に世話せい」と云うのである。おやかたさまは先生にせがまれて、着物を質入れして敷金をつくり、京都に部屋を世話してやった。

松木家の生活は、西大寺に引越してから一変に苦しくなった。天村先生は世の為国の為には、一身の得失を考えずやるお方であるが、家の事を思わない。「世の為一身を投げ棄ててやつて、それで食えな



当時お住いになっておられた
森田邸の離れ屋

ければ、親子三人喜んで餓え死にする」と云われる。これにはおやかたさまも困った。自分の手で出来るだけやろうと、宿病の身を氣張って料亭の女中の着物まで縫ったのであるが、夏もすぎ秋口になる頃は、目に見えて疲れを感じるようになった。そして木枯らしの吹く頃には、遂に目も見えにくくなり、足も立ちづらくなった。平生ご自分の躰はご自分でお守りして、躰の苦痛を家人にも知らせなかつたが、先生に、

「今年の冬は寝こむかも知れない」

と、フト弱音を吐いた。驚いた先生は、三輪大神の信仰こそ、惟神の道であると、大和神光苑を創めていた時なので三輪大神に、

「天村は変わった男で、私事をお願いした事はない、大神の神意達成に役たたして貰いたいと誠を捧げている。はじめて私事をお願いするのであるが妻が弱いので何卒これを丈夫にして貰いたい」

と、真剣に御願いした。おやかたさまにも、三輪のお札さんにお願いせいと云われた。おやかたさまは手を合わせていると、自然に膝に下るのである。神さんにお願いしたって、病気が治るかしら」と内心思ったが、先生があまり云うので、朝晩お札に向って端座して合掌した。

昭和二十七年十月二十九日、これまで下げては上げ直し

て合掌していた手が、上に上がり、それから両手で腹と胸をいやほど打ちはじめた。意識も普通である。そして又もとの姿に帰った。おやかたさまは、「躰の弱りに、自分が倒れたら家が駄目になる。天村も再び世に出られなくなる」と、事の重大さを思った時、自然に我が手で我を擦り廻すようになった」と、その頃の事を語られた。これが神秘になるはじまりである。おやかたさまは自然に手が働くので面白がってこれから毎日つゞけた。

音と なる

十月二十九日、おやかたさまが駄目だと思った時抱いたのは、背筋にへばっていた神産巢日神と云われる。これが十二月六日までおやかたさまの躰の度合いを見ていたらしい。六日夜何時ものように神棚の前に坐っていたら、突然

「とう~~~~~」

と、朗々たる音が流れ出した。そして色々手振動作があった。そして言葉となった。その一番はじめが、

「高い山から谷底見れば、なんにもないけど天村一家の誠が見える」

これから夜となく昼となく、神言が口について出つづけるのである。おやかたさまはもう昔の松木有子ではなくな

つた。何となくすることは少しも変らないが、口から言う言葉がすっかり変ってしまった。新らたな人間に成った。おやかたさまはその頃を回想して次のように語ってくれた。

「天村五日間外に出るなと云うた。天村に對する今迄だまっていた鬱憤を、こう／＼あめ／＼と云った。天村はその通りと聴いたので業が取れた。それから親類、友達、すっかり溝浚いするのに五日間か、つた。皆の業を取ると言うでしょう。私の口から洗ひ浚いに云われると業が取れるんですよ」

手記によれば

「神様は私が国だすけの台であると仰しゃいますが、私にはどうしても不思議で不思議でなりません。お国を助けるならば、男の人でお金があつて、しかもお徳の高いお偉いお方様が、日本中には沢山いらつしやる筈です。もつともそれは、男の方とはあながち限らないと思われれますが、私如き取るに足らぬ者、しかもこの様な多年の病弱、只々どう考えても不思議の極みでございます。それでもどうしても神様は、神の「やかた」と仰しゃいます。「妻よ許せ、そちの肉体を生涯やかたとして神が定めしぞ」といとも厳肅に仰しゃいました。

その日が昭和二十七年十二月十日午後三時、

「天の將軍国常立尊、この女を生きながら神の座に据え

しぞ、三輪鷲け、八大鷲け、蔵王鷲け、国津神は頭を下げよ。天津神は頭を上げよ」

と仰しゃいました。それでも人間である。私はどうしても、どうしても納得参りません事が数々ございました。ところが四日ほど前の夜のことでした。その事がはつきりいたしました。それは私のたましいの因縁と時であるという事を仰しゃいました。それにて私もどうやら、わからしていただいた様に存じます。」

そのたましいの因縁について、国常立尊の神言は、

「人間生を受ける時には、肉体は神が貸し与えて、魂だけが生と同時に肉体に神が差し向ける筈。その時に皆神が前世の因縁を知つて居る故に、この妻をその時に神が見定めしなり、そして妻が一人前の女となりし頃に、国常立尊がさがし出せし時は、病院に入院中なりしなり。これが今より三十二年前のことなり。

神はそれよりたえずこの妻に、人間としてのあらゆる茨の道を通らせしなり。しかるにこの妻、今日までよくぞ堪え来りしなり。人間として最高の苦しみをうけしにあり。神も今更の如く不憫に堪えず。さりながら、これは皆この妻の通らねばならぬ前世前世、今生よりの因縁の清算なりしなり。

時が来た、今こそ神が救いあげる時が来たのである。

されど只一ついかにも残念と思ふ節がここにあり。それはこの妻の肉体最早や最悪の肉体なり。神の手にも救うべからざる処まで枯れ切りてあり。返す返すも神の残念、しかしこれも皆神のなせる業なり許すべし。

さりとして最早や神も捨ておかず、妻を神は人助けの台として、三月二十日以降は引きまわすにあり。これがやがては大きな国だすけとなるにあり。銘記すべし。」

神々の仕込み

正月から神の仕込みは益々厳しく、四六時中、刺され通し、「しめぎ」にかけられた。天村先生が普通の人であつたら呆れて、氣違ひと思ひ病院に入れたであらう。天は高橋伸典氏のところに廻して、理法を学ばしめた。これでおやかたさまを抱きかかえることが出来たのである。しかし天村先生も御自分の理解出来ることは大いに喜ぶが、御自分の納得出来ないことには談判めいた云い方をする。時にはそんな神があるかと憤る。おやかたさまは御自分の知恵で云うのでないので、そんな時には随分苦しんだ。お嬢さんは、

「お父さんとお母さんは、神様がお母さんのお腹に入りこんでから、夜おそくまで喧嘩みたいに大騒ぎする」

と、嘆くのであつた。大家の子供が、おばはん気が違っている。気が違っている、と云い廻る。それを聞いてお嬢さんは泣き悲しんだ。お嬢さんは自殺の覚悟をした。その時神はお嬢さんを病気にした。おやかたさまはその時の事を手記に次のように綴っている。

「二月三日夜中から娘が腹痛を訴えた。夜が明けて医者に見せる。盲腸と云う。六日の夜明けに『今晚娘召す』と云うお腹の神様の声に天村は驚いて、『そんな不都合な事はない、そんな神様はない』と怒った。それでも午後から昏酔状態になりだした。夕方医者に見せたら腹膜併発だからすぐ入院と云う。私の方では、

「娘が入院ならこの女召す」

天村は困つた。処が娘の学校の同僚の先生（註・山本貫二郎氏）が、偶然にも見舞に來られて、

「奈良には神様のお台さんがあつちこつちに居て、神様の指図を聞いたらよくなるから、お母さんの神様の云われる方を通したら絶対じゃないか」

と云う。その方に思い切り、入院を思い止つた。そして私の腹から娘に、

「この母を熨斗つけて、三宝にのせて神に供えよ」

そして病気の理をくれぐれも云い聞かせた。それで娘はかすかにわかりましたと云うた。そして私の腹の内から

ら。ガスじゃ、ガスじゃ」と大騒ぎ。それと同時に、私は気が遠くなつた様に倒れる。でも耳に声は聞える、只躰がフワワリして起きられん。水を含んで、コクツと喉で音がしたら、目もあくし、躰も起きあがれた。

それ天の見せつけ、この肉体はまさかがあると知らしていた。その時の言葉は何もわからなかつた。今思つて全部が不、娘は翌日又医者に見せた。医者は驚きびっくり、又しても躰に落ちんという。それから四十日位で、すっかり私の腹からの指図通りの世話の仕方、食べものから一際調子を計つて、医者は只上べだけの事ですかり御守護を受けたわけ、それでも最後に医者云うのには、腹に「しこり」があつたらしい。それも何時のまにやら消えてしまつた。アア不思議!

私は後にも、先にも、娘の大患の時に手をあてて、一日中起き伏し共に着のみ着のまま、よくも夢中で世話に集中、娘死なすな、娘大事、腹で大騒ぎ、前述の夜明に、娘召すと云うた声は国津神の仕草、天は娘大事で生かしきつた。アア奇なり!

「病気を治し下さつた神様」と……娘はその頃は私の腹の中を不思議がつた。

誠 し ら べ

昭和二十八年四月二十六日に到り、おやかたさまは、久しく外出を止められていたその仕組が解かれた。「さあ、今よりは、出でて人の誠を見に行くべし」との指図があつた。そして昔なじみの宇治の黄檗紫雲院に四井黄風氏に会いに出かけさせられた。それからと云うものは、毎日の様に、神戸、大阪、京都、あちこち知人を訪問して、その家族の誠を見させた。朝起きると一日の食事の用意をしておいて、夜まで出歩くのだった。大した神様だと驚く日もある。しかしあまりスバ／＼云うので嫌がられた。

「昔の松木さんの奥さんなら来ていた、くけれど、神様のことを言う様になつた奥さんは、もう来てくれるな」と云われてがっかりした。昔のお友達もだん／＼なくなつてしまつた。それよりもおやかたさまを悲しませたのは、

最も愛してくれた巖父安藤重起翁(元横須賀市助役)に「お父さんは狐や狸のつきものなら、世の中の人に顔を

あわされんから、我が娘はもうないとあきらめると絶縁されたことである。その上先生に一文の収入もな

く、おやかた様も家計を資けることが出来なくなり、奈良の女学校に奉職していたお嬢さんの給与ばかり、生活はどん底にまでなつてしまつた。

知人への手紙にも、

「出て行け、出て行けでお金がいらすのが、私には実に堪えられません。電車賃がいると思ふと、又しても神様から叱られます。人間生活をかけはなれたこの日々に、私はこの頃極度に苦しみ続けて居ります。それを御存じの神様が「サア／＼だれか助けよ、助けよ、助ける人がある筈」とはげましては下さいますが、もうどうしてよいかわかりません日が何度もありました。先生にはおわかり願へると存じます。天村がお金に極めて無頓着、それが一つの行き詰りのもとでございませうか？昨日も天村が人様から「高い神様なのになぜいつまでもお金が出来ないか」と云われて帰りました。神様は「世の中の人間は、神にりやくを先に欲する、りやくはあとや。最高神は無やみやたらには働かん。いよ／＼の時にどん／＼働く」と仰しゃいます。

「人間わかつてわからん」

「この女をこりやく信仰につかふべからず、神の思わく、神の思わく」と仰しゃいます。毎日のように「さあ／＼大掃除／＼」きつと一度は仰しゃいます。家に居りますと苦しくなるので又出されます」

たましいの叫び

おやかたさまが神秘になられた前後の西大寺時代のこと

を書いて見たが十分でない。最後に、「草垣のたましいの叫び」—おやかたさま手記—により、当時のおやかたさまの心中を偲んで見たい。

「神様が何といわれても、あまりにもきつい過去現在、この草垣にはたえかねる。次に書くこと神きこし召せ。」

第一に金、次に家、次に夫、次に娘、次に世の中、あまた／＼、これが草垣の悩みとなる。人間草垣は石ではない、喰べたい着たいは当然である。それが神が徹頭徹尾さしづする。それは人間には出来ない相談である。よくも耐えたと思ふほど、只苦しいのは今の世に、あまりにも／＼出来にくい事が多い。針が持たれぬ。人にたのむにも金はなし、一枚の布子をもつても目がなやむ。それも眼鏡が買えぬ故、出るべし出るべし、歩くべしと神はせきこむ。西へ行つても、東へ行つても乗物のいる今の世である。それを神は知り給はず、しかるにあまりに惨酷である。縫わしてくれぬ神が残念。

重ね着せよと神は云う。重ね着するにも重ねられぬ十二単衣を神がす、める。昔と今としろし召せ。縫わして貰えばふるえぬけれどこれでは寒さに堪えかねる。正月十日が山であるとや、何の山かは知らねども、神も無情じや、草垣人間であるほどに、許せてんとうむし(天燈無私)といふ、その矛盾人間草垣にかえし給えや」……………(本部委員)

訪問記

花のおかりとさくならい
言同ほしにたづみて
遠まなばれを現在に見る

編集部

京都―森下邦堂氏

奈良―山本貫二郎氏

西大寺―森田元治郎夫妻

芦屋―池田夫人

森下邦堂氏

皇風煎茶道宗家、清風苑理事長。

天村先生が、希望社運動に参加されて、そ



森下氏

こで、お知り合になり、それ以来のおつきあい。

特に御一家が京都、清水寺の奥、清閑寺町におすまいの頃、しばしば往来されました。

森下氏談

天村先生は、普通の人とは少し次元が違うんです。尺度が違うんです。スケールがまったく異なるんです。それが返って誤解を招く結果になったんだと思います。よくは知らないけれど……先生を理解する人がいなかった。その為に、しなくてもよい苦勞をされておったようです。

東海道をガタコト、ガタコト走る時代に飛行機で東京へ乗り込んだりなさる。そういった、普通の人には考えもつかない事をなさる、それが他の人にはわからないのです。そして、怒のないお人です。そりや、大きな怒、つまり、国が大事だ、といったような大怒はおありになるが、小さな、「私」の怒というものがまったくないお人です。それを、時代や人が受入れず、何をなさってもそのご苦勞がむくわれなかつたようです。

その影にあつて、奥さまも大変、何かと御苦勞なされたようです。よくは知らないのですが、時々御夫婦で、こ、へおいでになりましたが、奥さまは、典型的な日本女性、普通の平凡な、その平凡な故に、ご立派な奥さまだったと記憶しています。

自分を少しも出さずに、つましい無口な、それでいて、大変に品のある奥さまでした。それから、絵が大変にお上手でしたね、奥さまは。この絵は月謝をはらって、本格的になされた絵だと、私は絵を見せていた時思いましたよ。天村先生が見せて下さったのです。

西大寺の方へ移られてからも、時にはこちらへおいで下さった事もあります、私には、とても心の美しい、純心というのか、純粹というのか、そういう感じのする奥さまでした。

神秘になられてからおめにか、つても、やはり昔のま、の奥さまでした。ご夫婦共々、大変なご苦労を経てこられたんだろうと思いますね。

話は前後しますけれどもある夏、紫陽花を天村先生がおとけ下さった事がありました。一寸した心を分つたというお人からだったようです。それをね、私は文章にして発表したんですよ。そしたら、皆さんから好評をいただいた。そんな事もありましたよ。その文章が残っていると思いますから、あとでお見せいたします。

(後文「紫陽花」)

山本貫二郎氏

ご一家が西大寺にお住いの頃、お嬢さまは中学の教諭としてお勤めになっておられ、その同僚に、山本氏がおいでになり、その

関係でご一家とおつき合いが始まった。

当時の収入は、お嬢さまの給料のみで、経済的にも、精神的にもご一家の御苦労は筆舌に及ばぬものであった。

おやかたさまが「天の台」になられための、天からの仕組としてのご一家のご苦労、そして、西大寺の時代には、お嬢さまの肩に重荷がかかったようである。

山本氏が強調される事は、この当時のおやかたさまのことは勿論であるが、特にお嬢さまのご苦労と犠牲であった。もしお嬢さまなかりせば、おやかたさまもなかったらうという事をよく知っていたらきたい。

と、氏は声を大にして云われるのである。「みつどもえ」ということである。宛主先生とお嬢さまも、おやかたさまとともども天の仕込みをうけられたのだという事を山本氏は云われるのである。

山本氏談

何からお話いたしましたでしょうか、浮かんでくる事を、時間的には前後しますが……。こんど菅原さんが伝記をおかきになり、それが出版されるとか、それでは、伝記とは離れて、お話しいたします。

最初に申し上げておきたい事は、当時のご一家の、特にあの方(注、おやかた様)のご苦労は、私がいかに語っても、その万分之一も語ることが出来ないだろうという事を、よく知ってほしいことです。

私は、若い人と話し合うのが好きですからあの当時、同僚の何人かが集って、食事に行ったりしたもので、そのグループの中に佳ちゃん(注、お嬢さま)もいたのです。

ある時、佳ちゃんが学校を休まれ、心配しているとお家から電話で、病氣だとの事、それで、国民健康保健の何か書類があるというので、それをもって、お家へうかがったのが最初のように記憶しているのです。それ迄は、ご一家の事は余りよく知らなかったのですが……それで当時、佳ちゃんが



山本氏

家へ帰えりたがらなかつた氣持が少しづつわかつて来ました。

神さんから言わされる、そして苑主さんから、それに対する反抗ですね、「そんな事してくれたら困る」という、そのいい方がきついです。苑主さんのご性格をご存知だと思ひますが、云い方自身が。そして経済的な面では、ぜんぜん氣にされないお方ですから、それでなおさら、あの方は苦しまれるのです。

でも、現在でもそうですが、あの方は苑主さんを奉つていらつしやいます。それはずっと以前からそうでした。そりや、片一方は高い神が出て来て、言わざるを得ないから、いいあいはなさいます。だけど、ちやんと、引くところでは引いておさまるよになさいます。

そして、苑主さんも、そういう問答をなさりながら、だん／＼と高くなられたように思ひます。

佳ちやんは、そういう御夫婦の間答を見るのが苦しくて、又あの方のご苦勞を見るのがいやで家からなるべく離れていたいと思つたのではないのでしょうか。

又あの方も、佳ちやんの事を非常に氣にかけておられ、「あの子にすまない、あの子にすまない」と、いつもいつも思われて

いるに違ひないし、又時々口にもされます。「娘がいるから生きています。」とよく仰しやると思ひます。ほんとうなんですよ。お嬢さまには大変なご苦勞をかけておられましたから、その事を、おやかたさまは今でも同じだと思ひますが佳ちやんの事を一番氣にしていらいしやるのと違ひますか。

ご自分のご苦勞はともかくとして、娘の苦勞を見ている親の氣持は、二重の苦しみだと思ひます。そのお氣持を私は、皆さんにわかつていただきたいと思ひますね。これは、私の感じですが、西大寺時代から今まで、ずーっとしんぼうがつづいて、いろいろ／＼と形は變つていられると思ひますが、とても素直でおとなしいご性格だから、何もおつしやいませんが、とにかくあの方に

ついては悪く／＼廻転しておつた、という事がいえると思ひます。

又これは皆さんもおききださうと思ひますが、とても／＼こまかいところまで氣のつかれるお方ですし、そして芯には強い

ところを持つておいでになります。棄てる／＼、と云つておいでになり、が

ん／＼しかつておいでになりながら、片一方ではなんとかして、というお氣持なんですよ。そういう事をよくお知りになり、紫の間だけのあの方を見て、あの方に接したら大きな誤りだと思ひます。それから、こんな事を云つておいでになりましたよ、何時だつたか、それはちよつと忘れましたが。

「こちらは、^{ちよつ}をしていられるのに、〇・五ぐらいしかそちらが誠を出さない、だから一をたすと二になるのに、そっちが半分もださないから、どうしてもならないんですよ、こんな事がどうしてわからないんですよね。」と……。

森田さんの奥さん

京都・清閑寺から移つてこられ、俊徳道に行かれる迄の三年間を御一家は、西大寺の森田氏の離れ家に住まわれた。森田さんの主家おもやから離れた六疊ひとまに板の間

だけのところである。ここでおやかたさまは神祕になられた。



森田さん夫妻

でよろしおまんねー、云われて、来やはったんですな。それが、あんなになつてしもうて(笑)。

さあ、初めの頃は、何も信心してはる様子はありませんでしたな。

ご主人はよく出かけてはりましたが、夜中に帰って来はりましたな、「おばあちゃん、おくさん、もう皆さん寝はりましたんか」と云わはって、浜松の土産だとか、東京の何とかとか持ってきてくれはりましたね。

お嬢さんは京都の学校へ行ってはりました。奥さんは時々出稽古に行かはった様子で、「只今帰りました」というてな、上品な、ほんとに上品な人でした。今でもその声が耳に聞えるようですわ。

それからすな、神さままつらはったのは。離れに、東西南北、あんじょう書いて、大きな声でとなえて云やはりました、それが初めとちがいまっしやるか。

その時分、そんなに困つてはったなんて知れしまへんよつてな。わてらと違いますよつてに、何にも云われしまへんしな。

よう、玉葱じゅん／＼、いためてい

ただいてはりましたわ。よっぽど、玉葱、好きなんやな、くらいで……判つてればその気になつてお世話もしたけど、判りまへんよつて……。そう云えば、米屋が出入りしての見た事おまへんな、どうしてはったんやろ。正月餅をついた時あげた事ありましたわ、あれで正月しはったんやろか。

ほんと、え、人でな、孫を可愛がつてくれはりました。孫は、人の家も自分の家も区別つきまへんよつて、砂糖のあり場所なんかちゃんと知つてましてな、あがりこんで食べたりにんかして、その孫も今年成人式ですわ。

不思議な事と云えば、家の娘の耳が聞こえまへんねん、それが「さあ、千恵子はんの耳、きこえた〜」云わはったら、ほんまに聞こえまへん、不思議だしたな。

火事もおましてな、ほんのぼやでっけど、おばあちゃんが入れた炬燵から火が出ましたんけど、皆なして消してましたん、その時、松木さん、大丈夫や〜、云われまへんけど、家の主人いうたら、「何もせんで大丈夫なことあるかい、消すから消せるんやわい」云うて怒つたりしましてな(笑)

森田さん談

さあ、何時頃でしたやろ、はじめ吉川さん(注当時の友人)来はりましたな、あんたんとこ離れがあいてるんやったら貸したげてくれー云わはりましたん、まんざら、いやとも云えまへんよつてな、まあ、四十日ほど

三輪さんへも、何時やら一緒に行かしてもらいましたな。ほんに、上品で、きれいで、え、人達でしたわ。

池田夫人

おやかた様は御影みかげにおられた頃、南画、書道、茶道、華道のおけいこに、藤尾草風先生のところへ行かれた。池田夫人とは、その草風先生のところでお知り合いになり、特に池田夫人とは親しくおつきあいになった。おやかた様が生長の家のお話をきかれ、その講習会に出席されたのは、草風先生のご縁によってである。



左 池田夫人 一 右 おやかた様
昭和12年の春・或るお茶席にて

池田夫人談

奥さん(注、おやかた様)はおけいこが好きで、それを楽しみにしていらっしゃる。どんな時でも、前の日風邪を引いて、私達も、決して休まれるという事はありません。で、明日は休まれるだろうと思っている時です。決して休まれるという事はありません。でしたよ。草風先生を大変尊敬され、又先生も奥さんをととても可愛がっていらっしやいました。

裁縫がとでもお上手で、そう申しあげる。と、「私は女学校の頃、お母さんから、他人が一枚縫うところを、二枚も三枚も縫わされたので上手になったんですよ。」とおっしゃられました。女学校時代といえよく、たもとにラブレターを入られた、などとおっしゃってました。そうでしょうね、色白で髪が黒く、とてもきれいな方でしたから。

当時からパーマントはお嫌いだったようです。お好きなのは、お鮎やうなぎで、その頃から、牛肉はいけない豚肉の方がいいなどとおっしゃってましたよ。

真白で、垢のついた着物など着ていらっしやった事は一度もありませんでした。お体は丈夫そうでなかったのに、あのお弱いお体で、何時の間にも、きれいに洗い張りされるのかしらと皆んな不思議に思ったものです。だから、時々、「美人は垢が出ないんですわ。」などと云って笑ったものです。

冗談が好きで、しょっちゅうおちゃん注、お嬢さん；当時は小学校へ入るか入らないかの頃、)をつれて、うちへ遊びにいらっしやいました。「私は笑いに來るんですよ」とおっしゃって、いつも手をマネキ猫のようににして、お話しされました。にぎやかな事がお好きで、とてもよく笑われました。笑いじょうごでした。その反面、泣きじょうごで、私には、時にはぐちなどこぼされたこともありました。

寂しい境遇の方だったんですよ、大変、人なつこい方で、誰とでもすぐ仲良しになられました。私なんか、あんな年寄りなどよく話が合うな、と思ったのに、私の母なんかとも仲良しでした。家族は勿論、近所の方々にも、松木さんくゝといつて親しまれていらっしやいました。

お話がともお上手で、お話ししている

といつのまにか時間が過ぎてしまつて、お泊りになられた事も時々ありましたよ。ものを云わないと口元がもぐくするから、鏡の前に坐つて、口をもぐくするんですよ、とおっしゃつて大笑いしたものです。しよっちゅうお父さんのことをおっしゃつていました。江戸っ子弁で、とても歯切れが良く聞いていて氣持が良かった。

紫色がお好きだったし、ものを大事にされるお方でした。奥さんの考え方や何かは、天理教や生長の家で修行されましたからその影響が大きかったように思いますし、もうその当時、すでに女性としては珍らしい程秀れていらつしやいました。人として完成されておつたように思います。

随分御苦労されていましたが、どんなに苦労しても、一寸もボロをおだしにならなかつたですね、苦しうなお顔もされませんでした。又その事で御主人をうらんだりなさるような事も少しもなく、いつもく御主人をたてていらつしやいました。

御主人といえ、その後大垣へ移られてから、お家の庭に咲いた水仙の花をとどけ

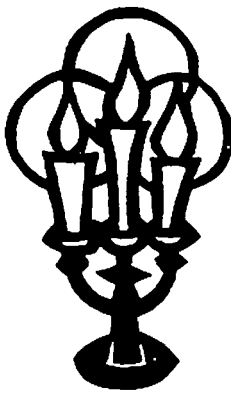
て下さつたことがありましたよ。

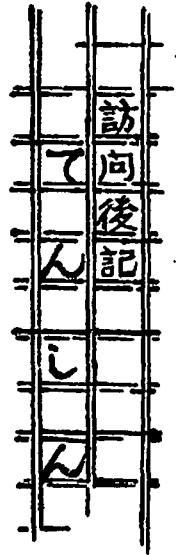
四十二才で九条武子さんがおなくなりになつた時、「あなたも四十になつたら死になさいよ。年とつてきたなくなつたらいや、ですからね」等とおっしゃつて、そうだと云い合つたものですが、お互いにこんな長生きするとは夢にも思いませんでした。お嬢さんが奥さんの生き甲斐だつたようですよ。

お体は当時からお弱くて冷え症で、いつも腰が痛いとおっしゃつて、ほっそりやせていらつしたからちよつと見てもわからないですが毛皮等をまいていらつしたようです。足元も危ないようですよ、いつもこうもり傘を杖がわりにされ、低い下駄をはいていらつしやいました。私が高下駄をはくと危いから低いのになさいとよく云われました。

でも病氣なんかしても決して医者になどか、らず、自分でなおされてしまします。身体が弱つてしまうような、ひどい下痢などされても、「下痢はお腹のおそうじだ」などとおっしゃつて、薬を飲んだりを決してなさいませんでした。

終戦の日、燈火管制がとけたとたん、一〇〇Wの電燈をつけたんですよ、などとおっしゃつて大笑いした事があります。芯のしかりした方で、世の中を遠視されておつた風がある半面、こんな処もあるんです。神さまになられてからも、二・三度いらつしやいましたが、「耳もとであれやこれやと云うんですよ」とおっしゃつて、困つたような顔をなさつていました。





それはわが心のちちははにして

またわがころのちからのいづみなれば

みしらぬわれのかなしく

あたらしきみちはしろみわたれり

さみしきは人の世のことにして

なつかしきはたましいのふるさと

おやかたさまの前に道はない。おやかた様のうしろに道は出来た。そして、その道は、果しなくつづいていた。

道程は幾何。里標は、あゆまれた道家のそここに残された花と石とに、かすかにしられる。

皮を破り、骨にくいいる 道普請。

花は、いばら。岩場には血糊が点々と。

そして、身を傷つけた花と石と人と、ひとつ、ひとつ、双手でひろいあげ、いた

かれて、大事に、大事に。

あ、それがむらさきという真珠ではなかつたろうか。

自然が与えた三つのみちしるべ。

た、ずまいは、みなしずかに、過ぎし歳月をたぐりつつ、くるくる語る糸ぐるま。

糸はひとすじ、ふたながれ、みつつとも、えのともしびを。

一、てんしん 点心 (森下邦堂氏を訪ねて)

茶うけは京の焼ものだった。ひとか、えもある水瓶を、火鉢がわりに囲みながら、

希望社時代、日の丸運動らのお話をうかがった。

いただきものだ、とおっしゃる外国たば

こが不思議に似合う、粋な、まあいい感じの、茶道のお師匠。

落ちついた、坐り心地のよい椅子であった。きにする時計をものかわ、語りてつきぬ、午後のひととき。

影のない、表のお話。気持の美しいお人がらだった。

白く、ひろい玄関を出て、たそがれの路地をくぐると下立売。表通りまで見送られ深々と一礼される姿に、作法のはての自然さが感じられた。

二、てんしん 天禰 その一

(山本貞二郎氏にうかがう)

薬師寺の境内に山本先生は住んでおられる。西大寺時代のお話を聞くために、京都からの帰りに、奈良へ廻った。

夜、なんの前おれもなく訪れたのに、少し細めの先生は、体中で微笑しながら迎えて下さった。指が細く長かった。

おやかたさまご一家には心ひかれながら寄ってくる人いやげがさし、なんとか離れようとしたこともある、という告白。だ

けどご苦労を見て、知らないふりはとてもできない、なんとかできるものならしてあげたいと思いつづけて来た、と。ゆかしい
あ、かい部屋とご家族だった。

お話は、指のように胸をつく。言葉にならないなにかを、体感じて表へ出た。
冬の夜の星が、満天に散っていた。

その二

(森田さんに聞く)

日であらため、山本先生にご足労願って西大寺の森田さん宅の隣家を案内していた。そして奥さんからお話を聞いた。

「何べんもな、この家、取りこわすべし
でしてんけど、潰さんでよろしおましたわ
でも、とりちらかしているさかいに、はず
かしおましてな」

六畳一間、それに板の間が少々。見たとき、あのおうたを思い出した。

一身はたとえ 飛鳥の野辺に 朽るとも
たまみがけとや 神のたまわく

平城宮址の上をわたってくる風の中に、
おやかたさまのお声を聞く思いであった。

三、天眞てんしん

(池田夫人に会って)

ひとつ、やはり唯一つであった。

芦屋の閑静な住宅街、石垣をめぐるた
古風な造り。その中で、夫人は静かに、た
のしい話題を披露してくださった。

蒼い大空の孤独。おやかた様の寂しさが
こ、にもあった、こういうお話相手を失し
なわれた、という……。

六甲は雪をいたゞき、上品に坐っていた。

○

心して撰んだわけではない。

風のま、に木蔭に立った。そして散るま
まを手をうけた。しかし、花びらの表と裏
はむつかしい。

そして、聞いたすべてを筆にするには、
童子の修行がいたらなかった。

(文資・高坂甚之助)



◇催物案内◇

講演と映画の会

講師 松木天村

演題

一、負けて勝つ

——人生哲学を語る——

二、知性を超え神の睿智に繋る

日本の道の展開

映画 新たななるもの生まれたり

16ミリ・イーストマンカラー

新しい道センター企画

新日本プロダクション制作

会場・日時

京都会場 五月十七日(金)午後一時

京都会場(岡崎公園)

東京会場 五月二十五日(土)午後六時

説話ホール(有楽町)

平塚会場 六月十五日(土)午後一時

平塚市民センター

大阪会場 六月二十三日(日)午後一時

大阪厚生年金会館(四ツ橋北詰)

随想

紫陽花

森下邦堂

美^{しが}れた紫陽花を買った。庭に咲いていたの去った後の机の上に、二輪を投げ込んでのが美しかったから、届ける考えで持って置いた。

きたが途中立ち寄った家で所望され、一枝 翌朝、原稿を書くために座り込むと、二枝と分けてしまったので、もう少しよりんより曇った朝の光線が、座敷を落ちつけないと言われる。見るからいといままで、て、花を浮き立たせている。

へなへなに萎れている。煙草をくゆらせ乍ら眺めていると、東山水切りをして、元気に生き返らせたこと 清水寺の奥―消閑寺の山裾から届けて下さるを思い出して、嬉しくて有り難うと貰うこと すが、友人のおもかげが去来する。淡色のとができた。贈る人もそれを知ってのこと 清々した一輪が、又一輪を集めて心を清め

であろう。萎れていても平気で、どうぞとるように美しい。言われる。私に、この心の用意がなかった それぞれに、そのまま、花と花との和なら、なんだ、へなへなの花を呉れる―失ができてゐる。花をささえている二枚の濃

札なと思つたかもしれぬ。い葉が、又何となく調和している。はたして、井戸水で水切りをして置くと、花も葉も気に入って、見守っていると、こ見違えるように生き生きしたので夕方に客んどは、大きな花を受けている茎までが、

やわらかい線で、大まかに花と葉をつないでいるのではないか、しかも花の色よりも少し濃く―葉のそれよりも、少し淡く―気に入って見れば何もかも、美しい所が目立ってくるものである。

贈られた花に教えられて、更に感あり。

「世の中の美しい所を見て歩こう、美しいことをさがして廻ろう、よいことを流行させて渡ろう。それはやがて私の心を、体を美しくすることだから―それはやがて、世の中を美しくすることだから。」

「清風文庫第一集昭和27年4月5日刊より
転載森下邦堂筆」



ねん縁

松籟のこととひ橋に たたづみて

残せしおしえ 掬すひととき

編集部

これは昭和四十三年一月三十日の松の間テ
ブ抄です。
おやかたさまのお言葉の端々に人は何を感じ、
何をなすべきでしょうか。

どうしても

千人の要人がいる

……私は阿倍野の頃に、どうしても千人と
いう責任を負わされているんですね。それ
を御存知ない方が殆んどですし、まあ無理
もございません、最近お越しになられた新し
い方が多いんだから。とにかくずっと前は、
首から先に棒げよと申した頃がありました
が、今はもうそれぐらいじゃどうしようも
ございませんのよ。とにかく身ぐるみ果せ
ということを最近云い出しましたのね。そ
んなこと、とんでもない、唯この場に出て
来るだけが精一杯で、人さんに云うなんて
……という気配がとて濃厚なんですね。こ
んな程度では一体どうなるんだろうな。え
らいこつちやと私思ったのが三十八年で、
実にこのお腹なかの中で大騒ぎしたんですね。
これじゃ大変だ、こりゃ大変だ、これじゃ

人を以て祭壇とする

新しい道は何も祭壇をもうけてない。は
じめはね俊徳道時代(29・30)は一寸種たねの
命と紙に書いて祀ってございましたが、阿
倍野へ来た三十一年から、そんなもの何
もいらん、何も祀らんのだ、この道は人
を以て祭壇とする。とこういったんですね。
当時私はおかしな意味だと思っていた

ならないです、俺は真実がわからなかつたんだ。本当はそういうことかいなといふことを知って下さるのが私本当じゃなかなと思ひます。重荷にされたら嫌でございませよ。そうと違ひますか。結局は廻り廻って吾に戻る、だから天の理だとういふ様なことが私をどん／＼落ちこまんとだと思つて仕込みなさいよとういふんです。これを、自分は、がれちやつてしていくといふことを、皆さんおわかりにです。人ごとだと思つてやれば、そこまともでもないことになるんじやないかと思つてもえたらありがたいんです。自分のことだつたう方はよっぽどどうかしてるといふんです。私がどん／＼落ちこんでいく、身体がずん／＼はまるんじやありませんかといふこと。それはそこをよく知らない方が思ふこと、中へ入つてしまふような気がする。ことを、皆さんそうだなとおわかり戴けるんだな、ですからね私は苦です。だつてね、れでは一寸しにくいな、これでは困る、こじやないかと私泣々そう思ひます。でね、えらいところへ来たと思ふんじやないかと思つては、一寸しにくいことをね。立この道は親類だと思ひになつたんではね、つのもどつこいしよとようやく立たなき熱が湧いて来ませんわね。親類じや駄目でやならない様な今日この頃になつたとは、ございませよ。やつぱり手前とは縦の繋り一寸自分で気になりますんでね。私が氣になるから又ワア／＼いわんならん。

私の寿命が縮んでいく

やつぱりね、千人にならなかつたらどうしようもない。千人のおとこ(男)とこゝういますのね。私三十八年頃に、三千人の中からよりすぐつた千人を確保するところ、皆さん方がおわかりになつた様に浮世が申しましたんでね。これ縦の繋りを知から札さんをどん／＼作つてましたら、サでもわかる方がたくさんあるはずですから、らなかつたといふんです。あの方は自分ア札さんにカビが生えるやら何やらで大騒よびますんで。みたまがことごとく皆が導いたからどうこう、それは横の繋りで

この道は親子のつながり

ては何ともいえません。

どうするか、手遅れだとはつきりやかた

すわね。横ばっかしいって縦を一寸もおゆいにならないから、今に私をホイッと全然見むきもしない。私が皆さんにお話しくなったら、もう知らん顔する人が多くなるんだらうなこの調子じゃ。それで私がね、ああこの人一人で偉くなったと思ってるのかな、けしからんなといひます。私が思う様になつたらその人駄目でございますよ。そういうことをどのお方も、まだ御存知なかつただらうということですね。

その嫌なんです。それにメシヤ教を棒にして迄本当に一生懸命なさつて下さる方らに申し訳ないんですよ。私又、そういう方もいらつしやるから気張れるんですよ。だからこそ何とかかんとか気張つてるんじゃない。そういう方がいなくなつたらね。私はもう本当に大阪だけだつたら、今日もおしまいだ、今日も場はたちませんよというかも知れませんが、

不肖の子

そういう仕込みを昔受けた。で今はぶんや、こいつ何しよると私はせめられます。なぐられはしませんけどね、あいつどうじや、不肖の子ばっかしじやとこういつてやられます。その度びに私の身体がガクンとやられるんですよ。人数が足りないこと

私はへらされている

そんなら私がこういうことをいうとどうお思いになるかしれませんけど、たてるということ、私が心配している、苦しんでいふということを知らないというんですね。この人数ではどうにもなりません。血をはくより他に方法がないというんですね。あつちの加勢、こつちの加勢があつてもこれではとても足りません。どうしてもこりや大変なことが湧いて来るなということが目の前に見えますね。私は最近の方にいう

それは私いろんな角度で減されております。おんななぐられたりさいなまされたりはしております。昔一二年間私はしめ木にかけられて仕込まれました。ございましてからね。ですから本当に自分で面びされる様にやられるんだということ。しめ木にあつたんですね。この女をしめ木にかけるとこういつたんですね。それで今、やたまらん／＼ということ、私ある時ね、五日間起きるべからず、ねとれ／＼と、そんな馬鹿なことあるかい。こんなに人情が紙の様に薄くなつて、不肖の子不肖の子

といわれたんじゃ身体がいくつあっても足りないわ」と私文句いってんでございますよ。余りにも理が重くて、これじゃいくら私がいったってその通りなさらないんだから池にはまって死んだ方がよっぽどいい。

これはもう死なして欲しいと、いつでも私は死ぬ。あの池に飛びこんで死のうと何回思ったか知れない。そうすると、死のうたってお前向こう迄歩いてよう行けんだろう。途中で人に見られたらえらい後手やで、恥かくて、……というんですね。ああそういうことが大分前にございましたんですね。んやでということをお前のいう通りだ時代が違ふ……ということ

で不肖の子とはいわなくなつたんですね。それ迄に私がキヤフン……とね、名前とう……その時期が来たんだなあ、こりやあは申しませんけどね、ああこれはあれでなつたんだな、今度又これでやられたんだな、あの人の不徳で私こうなつたとな、何人かから私やられましたんですね。それでもう全部痛いところが治っていた身体が、又そこ痛い、ここ痛いとお痛んだ訳はそういうこと

こういふ道みちなでございましてね。それが先達せんたつとしてなつたという事を知らない方が大部分であるから、やりにくうて……とこういふことなですな。

めどろがくるう

それで皆さんね、今日ひなか私が思いましたことの繰り返しを皆さん方に、明日の祈りは今晚だ、こうなんだ、月が鏡となるんやでということをお前の申し分でございしたのよ。それに

目算がかわる

度びに私は苦

すると私の左の目が四五日前から真赤になつたり、時々うづくんですよ。こんなことと今迄なかつた。そうするとね、ああこれ又天が何かやりかえつつあるんだなあといふことですね。天はこの道によつていろいろ目算があつた。ところが、これは一寸あれだからこう変えよう、ああかえようと時々目算をコツトンと変えちゃう。その度びに私の身体に異状を呈します。と天の目算が変る度びに、アレ不思議だなあ、アレどばりサン……とし替えちゃうんだとこういうしたんだらうと思つと、二三日たつたら

私のいうことが変わってくる。そういう時に、いえなくなるということが自分でこの頃、こう申したんですね。どうしてですか、きのうのあれか、或はアツこの目算が變つたことよつてああい風な格構にされちやつたんだなということがチヨイ／＼ございますんですね。そしてこの目がチク／＼痛いといふことは絶対何か變な風になる、何かやりかわっているんだなあとこういうこととございます。お前の想像通りとこう又やつてきます。あーあどうやりかわるんかしらないけれど、その度び／＼に何だか苦だわと私はこういう風に思うんですね。でこれ皆さんビュツとほのめかしますからね。そういう道なんでございます。

根に土盛れ

私は氣でもっている

こういう道は世に二つとは御座居ません。これを知らないでいるといふことは、お互いに御損じやございせんか。お知りになつた方がやりがいがあるんじゃないか。おきます。余り一生懸命いふと又口が廻らなくなるんですよ。そうすると段々ものが

今日菅原さんからのお話では、東京の二十八日の総会は一〇何人お集りになつたらしい。大勢お集りになつたなあ、大阪ではとても集まりやしないだろうといふんですね。そうすると大阪が元でございますからね、大阪が三倍も四倍もになつてなきやない、大阪が三倍も四倍もになつてなきやないはずなのに、東京の方が人数が多いとどういふこととございますかといふこととですわね。やつぱり東京人は氣が早い、これ私が最初からね、大阪の人聞いて下さいよ、もう大阪嫌だ東京へ帰りたいと云いましたのね。そしたら、おいお前東京へ行つたらいかんのじや、大阪におれ大阪にお

れ、こう申したんですね。どうしてですか、東京人は氣が早いでな、お前をすぐ御簾に入れるでな、お前早く御簾の中へ入つたらあかんで、とこういふんですね。そうですか、じゃ仕方がありません大阪にいますといふことになつたのが三〇年頃でございますね。私はお腹の声の通りに素直にしてみましたからね。

それでね、大阪人よ、大阪のド真中にこ

受けようでということになるんじゃないかなあというところに、天の南の一角の、やりかえるべき筋合が二三あるんだらうなという事です。

私が気兼ねを

する様では不

そこで、私としては皆んな必要なんです。

でも第一ね、何かにつけて手を貸せ〜というのは大阪ですわね。それが足りないですわね。あり余るほどあってこそワアワア〜といけるんですね。これくらいの人数ではどうしようもない。皆さんよく見ておわかりでしょう。三倍四倍あったら気楽に越せちゃう、それが気はあっても、仲々わずかな人数では骨が折れる。私に気がねしますよ。それが一寸不なんです。いけななんです。私に気がねしない様な風でなかつたらいけななんです。私は気がねする性ですからね。

それを皆さんどういう風におとりになるか。私がああもう残念だ、嫌だなあとなっ

たら、起き上れなくなっちゃうのもやむを得んのかなという事を今日この頃は切に思うんです。手を引っぱってもらわなければ起き上れない時もあるんじゃないかなこの塩梅では、という気がする。それくらい人数によって私の身体の内らがせめまわされるといふことですね。人数によつて何もかにも好都合なんですわね。それ程にも皆さんは思つてなかつたでしょうが、それが先決問題でございますのよ。

大阪で七十人

そして三千人の中には御婦人の方もたくさんいらつしやるだろうし、若い方もいらつしやる。とにかく四〇〇〜五〇〇がらみに思いを置いてあるのがこの場でございませう。さあ〜、そこに皆んな気がなうてや、気負わんかいな。こういうことになるかね、なる程、それではですわね、よ

りすぐられたお人が千人ということですね。すると又ここで一悶着ある訳でござい

らい人数ありますか。まあ、六〇、七〇になられてる方でも借りなきやならない。それを混ぜたつて到底足りっこない、という事です。

で七〇人、大阪に七〇人を一昨年おととしぐらいいつてましたね。それは丁度年格構を選んで七〇人のはずでございました。

あれから一人数はお増えになつたでしょうけれど、私としてはね、だつてこの方無理だわ、これも無理だわ、これ一寸気になるわという方を混ぜても七〇人でしょう。私

気がねではない、私これではしにくいんですわということになるんですわね。やっぱりね、タツタ〜とダブつく位で七〇人ありたいもんですわね。この方まだ日も浅いし御無理かも知れないし、家庭の事情もあるだろうから、この方〜で七〇人一寸当分、この方も余っているから無理願んでおこうというなりませうね、余つたらね。それがギリ〜どころか本當にないんでございませうからね。

おやかたさまを戴いて

“暗香浮動月黄昏”

林 盛道



「おやかた様を戴いて」という題を頂戴したが、これは今のわたしの心境にぴったりくるような気がする。今のわたしには、おやかた

様が何より大切であり、有りがたいことであり、おやかた様を戴いてわたしの生活があるのである。もちろん、この境涯は、初めからそうであったというわけではない。つくづくと人の世の道縁の不思議さに心を打たれるのである。尊い御縁によって、一昨年九月、わたしは初めておやかた様にお会いすることができたが、その時までには求める心は熱烈であっても、あこがれの半面には好奇心も手伝ってか、おやかた様のお姿を拝見したいとばかり心はやまなかつた。だが戦禍によって損ねられたわたしの視力には、おやかた様が鮮明にうつらない。それが

残念であった。有りていいえば、当時のわたしには、まだ自他の区別があり、二元的であったことを告白したいわけにはゆかない。ただわたしは真剣そのものではあつた。いちずに新しい道を体得したいとのみ熱願したのである。それには虚心でなければならぬと思つた。新しい水を注ぎこむには、壺の中を空にしておかなければならない。わたしは一切の先入感を捨てて、おやかた様のお話に心を澄まし耳を傾けたのである。その結果は、あふれるばかりの喜びに浸ることができた。大いなる精神的所得に、身も心も肥えてゆくような感じである。常に余りあるような心地。空っぽにしておいたわたしの心に、新たな力が与えられたということは有りがたい。パスカルは、無限の空間における永遠の沈黙に恐れをいただき、その恐ろしさによって、自己の内心を進化せしめたというが、わたしは、悠久の天の場から来る無限の叡智に喜びを感じ、その喜びを守ることによって、自己の心田がひとりでに開かれてゆくとするならば、嬉しいことではないか。この千載一遇の触発によって得た喜びの感動は、つぎつぎと新しい喜びを生み、かつ心の内を平安に導か

れたようであった。去年の三月末、わたしは道の場合にもどつて、紫の間の御垂示の外、ひとりでおやかた様とも会谈する機会を得たが、一層その喜びと平安が添加されていった。あれから後の五月二十七日未明のことである。小学校時代の同級会に誘われたわたしは、五十年ぶりに再会した旧友と連れだって前夜から同宿し、一夜語りつくしたが、寝につこうとして手洗に立つと、昼間出ていた水道が出ない。やつとのもので風呂場で洗ったが、おやかた様を念じながら床についたところ、快い夢を見た。すばらしい庭内の井戸から手がとどく程にこんこんと清水が湧いてくるではないか。きれいな娘が二人、柄杓を持ってわたしの手にかけてくれた。「半杓でよいから」と辞退すると、「いくらでも湧いてくるんですもの」とつつましく親切である。「溜れるよ、溜れるよ」といわれながらよちよち歩きしている幼児を抱きあげてから、わたしは天の一方に向かい、感謝をささげたのであった。これはおやかた様のお導きだとわたしは思っている。もつたいない。こんなに仕合わせすぎてよいものであろうか。わたしは気のつかない過ちでもあったらと、幾たびも天にお詫びしたのであった。

ブルーストは、「未来へのよい想像を追求し、それが過去のよい記憶と一致する時、われわれの人生は最も幸

福である」という意味のことをいったが、この点、わたしはあまりにも恵まれすぎているように思う。憚り多いことではあるが、このような張りのある内的生活を過ごさせていただいているというのは、そこに何か深い因縁と理由があるのではあるまいか。新しい道の理と法が、成熟しつつあるのかも知れない。有りがたいことである。わたしはこのことについて、改めて細かい分析を試み、一つ一つその成分を拾いあげてみた。第一は、友情である。その友情が、わたしをして「この道」に入らしめたといつても過言ではない。約四十年前、わたしは同門の友人たちと一つ屋根の下で同居していた。ある秋の夜、発熱して苦しんでいるわたしを、一晚中冷してくれた友がいた。その友が今の菅原茂次郎先生である。あたたかい友情が信頼を生み、この友の勧めることならと、無条件にこの道に飛びこんだのである。第二は、「母の愛」といいたい。わたしは幼時最愛の生母をなくし、年をとるまでそのイメージを心から離したことがない。幼い日の母の言葉など、まだ身にしみているものがある。天の川の七つ星に因んだ天人の話。天上界に七姉妹の天女がいた。末の天女が人間界に降つてある男性と結婚し、一男を得た。天上の姉たちに憚つて、子を置き去りに天界にもどつたが、地上では「天人」「天人」と

いつて崇め、「子もいることだから」とその再臨を待望したという。母はまた、常に臍の大事なことをいつていた。臍によって母子一体・祖孫一体であることを分りやすい言葉で話してくれた。新しい道の本に接して、はつと胸に打たれたのは、この「天人」と「臍」という文字である。跳びついて行ったのも偶然ではない。もちろんわたしの胸に残っている幼い日の物語は、単純なもので、新しい道での深い理と法に比べれば、たわいもないことであるが、この「驚き」は、探求と没入の発端となった。失礼になるかも知れないが、わたしはおやかた様にお会いして、「骨肉の母」を想い出し、こみあげてくるものがあったのである。第三は、「地」の縁とでもいおうか。おやかた様は、お小さい時、しばらく台湾の台北に日を過ぎたと承るが、わたしもその何年か後に、同じ台湾の南部に暮したことがあった。また御嶽父は官吏生活をしておられたことであるが、わたしの父も小役人をしてきた。幼ない目に映じた当時の南国の山や川は、今も忘れることはできない。「雲山蒼々江水汪汪」などの句は、長じて読んだものであるが、その感動は、すべて大げさにうつる幼ない日に得たものである。就学は主として九州から東京で、専門研究は主に中国に渡ってからであるが、人生の出発に際してのこの幼年期を、わたし

は大事にしたいと思う。第四は、「道の理」を挙げなければならぬ。「道」という言葉は、親から師からどれほど聞かされたことか。わたしは終戦前後において、学徒動員のため、優秀な青年を失い、独り命を全うしたが、その代り、極度に視力を害された。手術して悩んでいたわたしは、沈思の末、「斯道」という漢語から思いつき「この道」と和風に用い、これによって自他が救われるものとした。実は絶望の極に達したとき、従来学んできた聖語も経文も、はたまた座禅やみそぎの行も、急場には間に合わず、ふとした瞬間に幼時にかえり、「おかあさん」と呼ぶと、不思議に悩みは解消され、安らぎと悦びを味わうことができた。わたしはこれを人格化して「親」を「おほみをや」と称し、世界の同胞がまじめに、この道を実践してゆきさえすれば一路平安であり得るとした。「この道は、わがおほみをやの光り耀くさきはひの大路なり。われら心を洗ひてこれに従い、正しく踏み行ひておのもおのもの務めを樂しみ、人皆がいやさかに榮えむことをことほぎまつらむ」と。拝むことも祈ることも大事ではあるが、実践を一層大事なものとし、「その実践し得た瞬間を祝福せよ」と強調した。これは昭和三十六年新春における素朴なわたしの「道」であったが、昭和四十一年初秋において初めて新しい道の場に

臨んだ時、おやかた様が「この道」「この道」とおっしゃるので、わが「道」と思い合わせ、すっかり敬慕の情を深めていった次第である。

たびたび新しい道の場にもどり、おやかた様の御垂示を戴き、天村先生のお話をも承り、来往の道友たちと親しくしているうちに、ほんとうに場がわが家のような感を抱くようになった。こうなると、もはや詮索などの心は露ほども見られない。ただそのいわれたことを心にとめて、没頭するだけである。二元的から一元的となったわけであろう。一つ一つの事柄が、光り耀くようになり、その光り耀く心理を、ますます愛するようになる。道の場においては、名はいちいち挙げないが、みんな善意の人、親切な方ばかりのように思われる。その雰囲気が、草木がいっしか伸びてゆくように、みんなも意識しないうちに伸びてゆけるようで楽しい。おやかた様を中心に、皆さんと松の間に集っていると、何ともいえぬ嬉しい気持ちになる。おやかた様と初対面の時は、自他の感がはっきりしていたが、今やその意識は完全に取去られ、全く不可分で一体となった。中国明代の詩人林和靖の句を想い出す。「暗香浮动月黄昏」と。月の夕暮に、梅花の香りが、どこからともなく漂うてくる風情である。松の間でおやかた様にお会いしていると、このような感じが

して貴い。この感じは、恐らく誰しも同じことであろう。十七世紀におけるフランスのモラリストたちは、人間の内的生活について、しきりに心理的分析をなしたが、われらのこの気持は、果してどんなものであろうか。もちろん「天の理」によって、お互の実生活を正してゆこうとするのではあるが、場におけるその雰囲気は、全く尊敬と親愛によって結合されているものだと思われる。この認識は、外面的な交りだけでは得られるものではなく、内面的な反省によって自然に備ってくるものであると思う。おやかた様を戴くわれらの気持は、もはや理屈ではない。場を離れて、家庭にいる時も、おやかた様を戴いて生活しているのである。「独りでいる時が最も独りでいない時だ」といったキケロの言葉は、そのままがわたしのこの頃の生活をいいあらわしているようだ。わたしは、自分の子どもの外に、大勢の青年男女学生を取り扱っているが、みんなと離れて書齋に独りいる時も、独りではない感じである。離れてはいても、おやかた様との心の通路は、大きく開かれている。ある日、書齋で独りいる時、「おーやーかーたー様」と意識せずして声を発したことがあったが、何ともいえない幸福感を覚えた。今は家族も学生もみんな平安で明るく生活をしている。これは、おやかた様を戴いてのお蔭だと感謝にたえない。

大器晩成に鞭あてて

吉田 英二



わたくしがこの道に縁あつてつながらせて頂いたのは昭和四十一年四月でした。数えて三年、しかも夫婦そろつてこの道を通らせて頂けること

を思いあわせて嬉しいと思います。人さまの中に出ても自分だけが何だか物の真実、本当のものが判っているようなおこがましい気にもなつて心強いものがあります。同時に本当に出来ておられない自分を情なく、人さまに話してもなかなか判って頂けない至らなさをかちつ、ここににお恥しいながらこのわたくしをみなさまの前に曝させて頂き、堀らせて頂きたいと思ひます。

ご明断で「お前さんはな、大器晩成じゃでな」と仰せられまして、これは大変だ。いくつになつたら「成る」のかな？ 大器はとも角、晩成とあつてはこれから何歳まで生き延ばさせて頂いて「成る」のかなあーと。今に

なつて判らせて頂きました。成程晩成じゃ、三年たつてもまだヨチヨチ歩き、遅々として進まず、「これが晩成の姿である」としみじみ悟らせて頂きました。お恥しく、急がれるこの場でヨチヨチ歩き、たゞ申し訳ない限りであります。

その後何回もの御垂示にも「ポイと放つたらどうじゃ、その気じゃ」、「臍が胸まで上つたり下つたりじゃ」と、氣持の上では「通らせて頂くんじゃ、何も考えることはないんじゃ」「なるようになってくるんじゃ」と自分と自分に云いきかせ、とに角戻らせて頂き、少しでも多く理を頂く、そして「人をたてよ、理を吹け」とのお示しを通らせて頂く以外ないと信じております。種は蒔いても芽を切らない。コンクリートの上に蒔いているんじや、と道の方々に笑われております。おやかたさまを頂いて通るその「まこと」の至らなさをまざまざと反省する日々であります。

「おやかたさまを頂く」、それはおやかたさまを知ることであり、通られた道を判らせて頂いて通らせて頂く以外にありません。その通られた道は実に痛々しい荆の道でありました。「お前さん方にわたしの様に荆の道を通れとはいわん、道はできています。コマゲタはいて通れるんじや、通らんかいな」、こんな有難いことはない。お

やかたさまはこうも仰せられる。「この女コチャンコチャ
ヤンにされたんやで…」と、まことに痛々しく、勿体な
いことであります。

身上、事情は天の采配、その果しの道としてこの道
に行じさせていたゞく、而も「ながらのみち」として日
々に身をそぎ、夕べに感謝する、ご垂示に従って行じさ
せて頂く以外ないと信じます。ある時松の間で「わたし
が若い頃よく口ずさんだ和歌を朗詠しましょう」と……
たらちねのにわの教えはせまくとも

広き世にたつもといとはなれ……

思い出されるまゝに四五首声たからかにおうたいになら
れました。きれいな若々しいお声、その中に厳肅さが身
にしまる思いがあつて崇高なものを感じさせて頂きました
が、それよりも何よりも、たゞ涙のにじむのを押える
ことが出来ませんでした。国だすけ、人だすけに一身一
宗を犠牲にされるの已むを得ない現実のご身上、身そぎの
ご日常、ご心境、たゞ頭の下るばかりであります。

このご心情を安んじて頂ける事はおこがましい乍らここ
の道を素直に通らせて頂いてたゞ喜んで頂く、おやかた
さまの「氣」を氣として歩ませて頂くことに尽きると思わせ
て頂いています。そうわたし自身に云いきかせておりな
がら遅々として進まないことは申訳ない限りであります。

それにしてもたくさんのお蔭を頂いております。わた
くしの十二指腸潰瘍も、痔疾も何時の間にか癒っている
ことに驚きました。家内の高血圧の悩みもとれて、どう
やら、氣にならずに安定しておりますし、家族みんな和
氣アイアイに喜ばせて頂いております。とともに大き
なお蔭はわたくしの身上、事情の変化について、すべて
が「見知らせ」として判らせて頂けることであります。
そしてその度に自分をみつめつ、歩ませて頂けることは
安心立命の姿ではないかと思わせて頂いております。

去る年末近く松の間で「吉田さん、男の背には甲があ
るんですよ、お前さんその甲がつきぬけているで…」と、
仰せられました。そうだったのか、甲がつきぬけて「甲」
になる。お経に……心根は嘸喉の如し、しばらくもとゞ
まることなし……と、その通り、フラフラとして心定ま
らずと云つた点をご指摘頂いたものと悟らせて頂きまし
た。明けて申年、同じ申なら三猿主義、「人のよいこと
を見て、いらざらんことを見ざる。」「理に合つたことを
い、いらざらんことは云わざる。」「嬉しいことをき
き、いらざらんことはきかざる。」「たゞ見るも、云うも、
聞くも一にも理、二にも理、三にも理、天の理を体して
日々を行じさせて頂き、「申」でなくて人にい、ことを
物「申す」、理を申させて頂く、理に徹することに努め

させて頂きたいと思わせて頂いております。

この道は悟りの道であると教えられております。而もその人の出来如何で受けとり方、その深さがちがっている。道の方々と話合っても——あ、そう悟るのか、そう受けとるのか、この人はなかなか出来ている立派な人じやと感心させられます。従って最初からとに角、みなさんの中に割込んで一言一言を素直にきかせて頂きました。

わたくしはどなたとでも厚かましく話させて頂ける果報ものであります。その度毎に判らせて頂く喜びに溢れることが出来ました。最近になつてやつと少しづつ道の方々と話を通ずるようになったことは有難いことであり、一つ判らせて頂く度に空腹に一飯を恵まれた喜びであります。

その「喜び」を人さまにおすそわけ、と教えられております。お蔭さまで、世の人々に話せる機会に恵まれたわたくしには「親子の躰はアイアイじゃ」、「上皮の自分を脱ぎすて、本当の本当の自分を」、「お腹のどん奥の声をきけ」、「子の姿は親への身知らせぞい」と云わさせて頂けるようになったこと、それを喜んで聞いて頂けるということはこの道につながらせて頂いたお蔭であります。更にこ、一番その人々を真におたすけする「信と誠」の悟りの弱さを痛感しております。「急ぐ、急ぐ」この場

の切迫、たゞ晩成のわたくしにひたすら鞭うつばかりであります。
(京滋支部推進委員)

おやかたさまの微笑み

木村 保



大学在学中、二年生の或る日、授業が一段落したので何気なく校庭を歩いていた時の事である。「都合がよかつたらカレーライスでも食べに行きませんか」と、突然話かけて来た学生がいた。私はこういう場面には其の時迄出会つた事がなかつたので少しビツクリしていたが、相手の顔には愛相があるし信頼して一緒に行く事にした。私は「心臓の強い人だなー」と恐れ入つたことを記憶している。今日迄の友情はこういう機縁で結ばれたものである。

現在、大阪の或る衣料品会社で働いている田中明君がその「心臓の強い人」である。大学一年生の時から二人共第二外国語はロシヤ語であつたから、その時間にはチヨイ／＼一緒になる事があつて、たとえ私は彼を知らな

くとも彼は私を知っていたのかも知れない。

このころ（三十六年六月）田中君はすでに「新しい道の場」に繋っていたのだから驚きである。何の前ぶれもなく、誰の紹介でもなく例の如く此の場の天門を叩いたというから、よほどの徳人であろう。

それまで「生長の家」や「ヨガ」に興味を持ってはいたらしいが、とにかくまだ二十才前後の若さで期末試験もスツボかして「大阪へ行っておった」と聞かされては「呑気な男だな」と感心ばかりもしておれず、ロシヤ語は四年間もかゝって修得する始末に私は友人としてハラ／＼していた。

其の田中君から「新しい道の場」を紹介してもらったのが三年生の時で、当時喫茶店をよくタペリ込んだものだ。そして「統一理論」という言葉を聞かされ、この言葉に私がアイン・シュタインの「相対性理論」を引き合いに出して「其のお方はアイン・シュタイン以上の人だ」と、当時おやかたさまについて何も知らなかった為そごう冒った事を憶えている。そうこうしている間に其の年も暮れた。

明けて昭和三十八年、春、三月、私は初めて「新しい道の場」の天門をくぐる事になる。卒業も間近い、就職も考えねばならない。初めて迎えた人生の岐路であり、

初めて辿る道である。風はまだ冷たかったが私は田中君と大阪へ向った。

場に到着後荷を置いて、平井谷先生と田中君と三人でうら、かな陽光の中、正門の所で円くなって雑談をしていた時、丁度おやかたさまが御住居のお庭へ散歩におでましになられた。

私達が御挨拶をすると、おやかたさまはニツコリと、たとえ様もない微笑みをたゝえて御挨拶をお返し下さったのを今でも目に見える様に記憶している。こぼれる様な笑顔という表現で云い表わすべきだろうか、生まれて初めて見るそれだった。

多分、私のヘソは「親おや」と驚いたに違いない。おやかたさまの微笑みが本当に自然で、底には愛々々、……が秘められたそれであった様な気がする。（私は其の時までカチ／＼になっていた）私自身が場に非常に愛着を感じて今日にいたるのも、最初のこの微笑みが忘れられない為に外ならない。

ところで御明断は三月十日にお受けしたが、気がついてみると此の日は私の誕生日である。偶然というか神秘というか御明断をお受けして「第二の誕生日」と大いに喜ばせていた。田中君もまるで自分の事のように大喜びしてくれたのを憶えている。

それから今日まで満五年になろうとしている。その間、自分自身の取り乱しと無理もあって場に御迷惑や御心配をお掛けし、つまづきや紆余曲折もあって、果しも出来ずに現在に到っているのであるが、おやかたさま、天村先生をはじめ場の皆さんのなみなみならぬ御指導によって、ようやく今日独り立ちしても社会、世の中に処して行ける気概を持ち得る程に成長させていたゞいたように思える。

しかしながら自分のいたらなきから、私が場に帰るについては、経済的な面において親子の情がからんだり、家族に相当な無理もかけて泣くに泣けない事もあった。皮肉な事に父の「おへそ」を受け継いでいるはずの自分が、その父によけいに反発抵抗を感じた事であった。

一方こういう中であつて「信ずることの偉大さ」を泌々と感じ得たことも真実である。いろ／＼考えさせられ、教えられ、学ばされる道すがらであつた。「家族に新しい道」を一生懸命説いた事も云い合つた事もあつた。そして言葉だけでは人を真に説得する事は出来ない、私は行動まで持つてゆかないと成果はあがらないと自覚するようになってきた。おやかたさまが「人を変えするには自分自身を先ずつくり変えなければならぬ」と仰しやるゆえんも其処にあるのではなからうか。即ち「盲行一致」

「知行合一」でなければならぬということである。通らせていただいているのだ」という思いと喜びが私を押し包んだ。

又一方私は教職(高校)に携っている関係上親と子のいろ／＼な問題におつかる。両親が信仰に一生懸命で実生活と信仰がチグハグに感じられ、子が反発し家出や不良化へ走っている場合や、親に勘当され、東京から田舎の島原などに来て親戚から通ってくる生徒、その親戚にも居た、まれず転々とする生徒、そうかと思うと、男女の交際に親が怒り、子を退学させるという事等々などがある。

こうした問題に当面した時、私は「新しい道の場」に繋つて頂戴した「理」を一番に思う。その時私自身が「一まわりも二まわりも大きくなつた様な、実に大きな味方を得ている様な強味を感じる。

そして「理」を説いて相手方に受け入れられた時、「理」を練り合つて話を進めた時など其の問題の運びを見ていると実にい、ように仕廻されて行くのである。

九州という「場」から遠く隔つた所にあつても、何時もおやかたさまのおはからいが感じられ、事あるたびに私には最初の日のあのおやかたさまの微笑が思い出されなければならないのである。

(九州支部推進委員)



救いと心

矢野誠

「山川のすえに流るる橋からも身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」「飛びこんだ力で浮ぶ蛙かな」のように、躊躇遠慮したり、焦慮心配したりすることなく捨身、信ずる道をまっしぐらに突き進め、という教え。

「災難に逢う時は逢うがよろしく、死ぬ

を転じて、人間以上のあるものの存在に氣

附くようになりませう。それでも、なつて来た姿を見て心を低くすることが出来ないで、日ばかり昨日は過ぎつ明日は知られず」の

て欲しい、というよう願望が先に立って、而して新しい活路を見出せ、という教え。

「超然たればカルマは足下を通過す」

「寒熱の地獄に通う茶柄杓も心なければ苦

に走るのが一般のようです。そうした場合に、少しも困惑したり、周

章狼狽したり、苦悶したりしないで対処出

来るように、又そういうことがないように、

人間は普段ことのない時に準備を整えてお

うに、自分の周りの凡てを自らの血肉と化

せ、という教え。

「音もなく香もなく常に天地は書かざる

経を繰返しつつ」のように、万象の声を

聞いて悟れ、という教え。

等々色々あるようです。いづれの教えに

しても、そこには必ず心の問題が、その文

字のあるなしに拘らず絡んでいて、これを

—

人間は一般に何かの事情がせつまつた形で身近に迫って来ないと真剣に考えようとしなもので、自分が平穩無事な状態にあるときには、人が困っていても村岸の火災祝し、いつ何時自分にも火の粉が振りかかって来るかも知れないことに氣附こうともしません。中には他人の不幸を心ひそかに喜ぶ人もあります。

所が、一旦自分が不測の災禍に逢うとか、医学に見放された病に取憑かれるとか、再起し難いまでに蹉跌するとかいうふうな窮境に追いこまれると、何とか切り抜けようとしてもがきませう。皮肉なもので、人間が逆境不遇にあるときは、もがけばもがくほど、一層泥沼の底深く沈んでゆきます。愈々駄目だとなると、漸く現実の世界から目

抜きにしてはどの教えも成り立ちません。になれるのであります。そのままの状態であらうのであります。食事は心というものが、何にでもくつつく、喜んで生活したらよいのであります。そこで、おいしく食べて、よく消化もするし、どうにでも動く始末の悪いものだからでして最大の幸福というのは、まづ第一に、そのままでまっけっこうで幸福になることです。心には、その与えてくれた天の存在をも否認する自由があります。況して人間の實在性（へそ）を否定することなど訳はありません。それだけに心というものは恐ろしいものに相違ありません。

「心は地獄を取り、心は餓鬼を取り、心は天地を取る」（出典失念）
これが最大の幸福ではなからうか、と思うのであります。

「心のおそるべきは、毒蛇、悪獸、盜賊、どのような状態でも幸福になるのには、
もとはこちらそのまままっけっこうの真理をよよく理解することです。この真理が分らないと幸福にはなれません。人間の身の上

に現われて来る一切のことは、良いことも、悪いことも、大きなことも、小さいことも、凡てそのもとは自分にあるということであらうのであります。この道理が分ると、そのまま有難くなるのであります。そのままが、有難

二

ここに二十年の歳月を費して教えの土台を築かれ、人間の幸せは結局心の持ち方によるとの結論に到達された現在八十有余才の某翁の教えを御紹介したいと思います。

「幸福になり度いと思えば、誰でも幸福方をしたらよいかと言いますと、もとはこちらそのままでまっけっこう、を實行すれば大往生

のみ手は、どこにあるんじやろうな。さあ

ここに重要なポイントがあります。

さあ、どうー」（昭和四十二年十二月六日

内側の方にポツカリとな、おわしまししょう

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

ぞいな。救われちゃわにや、どもこもなら

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

ん。さあ／＼、さあ／＼、やあ／＼、どう

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

／＼。救いのみ手がどこから、ふわーふ

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

わーと、おいでになると思いなや。我の身

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

の内にありじやえ。さあさあ、どうじや

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

やあ／＼、やあ／＼、やあやあ、どう／＼

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

あー」（昭和四十一年八月十八日御垂示）

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

四

この道を御存知ない方が某翁の教えと道

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

の教えの両方を一寸説まれたら、或は、よ

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

く似ているな位で済ませてしまわれるかも

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

知れません。が、大きな根本的な違いがあ

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

ります。それは申すまでもなく、この道の

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

教えには「自分には理がある。理というも

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

のが腹にすわっている」と、はっきりお示

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

し下さっていることです。某翁の教えは、

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

要は心の持ち方だけの問題ですが、この方

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

はそれで救われておいでになります。それ

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

ならば、必ずしもこの道の教えは必要がな

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

いではないか、ということになります。こ

「おい／＼おい／＼、心通りの守護、こ

心だらう。さあ／＼、へそー。さあー、心。三年一月二十六日御垂示）

と、ある通りです。往くに往けん、越すに越せん、通るに通れん瀬戸には、日本人のへそは、皆驚いて目を覚すそうですが、筋目が立っていないから、めどろがないから、危いのだそうです。

『救いの理』は、この道にあつては、千すじ万すじの理の、ほんの一すじにしかすぎません。これによつても、この道の理が如何に高いかが分らせて頂けます。人さんによつては、この理一つを如何ほどにも高くお買いになるでしょう。

最初に、救いとは一体どういうことを謂うのか、ということ在不問に附して、お互いの漠然とした気分的了解をもとにして出発しましたが、今日までとはかく、これから先の救いとは、この理を通らせて頂くことでなければならぬ、ということになるでしょう。

日々心調べをすれば未だ穢く、おやかた様から喜びが薄いと云われている私が、このようなことを書かせて頂くのは、語るに落ちる話で、おこがましいのですが、どうしても何か書けとのことですので、一人でも多くの方にこの教えをお知らせしたい、

と願うとともに、敢て自らを晒させて頂いたが、もとより悪意を以て批判するためのものでないことをお断りしておきます。

と次第です。高、文中某翁の教えを引用させて頂きま

(本部委員)



《新しい道》を志向する

世界の宗教界

櫻木健古

ある新聞の宗教欄から

昨年(昭和42年)の六月十一日、《場》

筆者は横浜の宝生寺住職で相模工業大学助教授の佐伯真光氏。この日の宗教欄の中

から帰宅の途中、名古屋の実家に立ち寄り心記事で約三百行という、新聞論稿としてその日の中日新聞朝刊をなに気なくめくつてみると、「宗教のページ」に面白い寄稿「米国で流行の無神論キリスト教——神の文がみつかった。「国教」をもたない日死を宣言——イエスを信仰の中心に」とい本が世界を導く」という命題のひとつの証のだから、キリスト教の信者ならずとも明になるものと思われたので、持ち帰って眼を惹かれないわけにはゆかない。保存しておいた次第である。あるいはご参無神論キリスト教」という一語が、私の考になろうかと、ここに紹介してみることの眼にもグサリと突きささった。神を否定するキリスト教なんて、言葉の矛盾としか

考えられないからである。しかも、「神々 教会では、日曜日の説教にこの問題をとりはもう要らぬ」というおやかたさまの教え あげないと、人びとの集まりが悪いほどでと、符節を合わせているからである。あるという。つまり、時の話題」となつて

佐伯氏によれば、無神論キリスト教は、

「一般に『神の死神学』（神は死んだ、と主 むろん、この『神の死神学』は、宗教界張する神学）と呼ばれ、アメリカの新しいの権威者たちからゴウゴウたる非難を浴び神学学派として、最近急に注目を集めるよており、有名な大衆伝道家ビリー・グラハムになつたという。これの主な唱導者は、ムも、雑誌や講演で『神は死んでいない』

四十歳前後の少壮神学者四人で、いずれもと力説するのに大わらわであるという。

無神論」を唱えた著書を著わしている。この大騒ぎは当然であろう。「神は死んでいない」として注目に値することから、最大の革命的思想であろうから。マルチンらからジャーナリズムが大々的にとりあげ——思想的には——スケールは小さいはずなので、いまでは国民的な話題になりつつである。

「週聞誌『タイム』は、一九六六年の四月を否定し、神の死を宣言する。彼らによれば、伝統的なユダヤ・キリスト教の神の

集号を出したが、時の人の顔写真を表 概念は、今日ではまったく時代おくれで、

紙に使う習慣を破つて、黒地に白抜きで、単に偶像崇拜の一種にすぎない。宇宙の

『His God Dead?』の三語だけ、という思いどこか、外にいます」というような神の

切つた表紙。もつてその力の入れかたが分 概念は、歴史の中に超越的な神の意思が

ろうというもののだ。働いているという考えとともに、捨て去

この特集号によると、最近のアメリカの らねばならぬ。この世俗化し、非宗教化

した二十世紀の今日、神は死んでいるのである。（中略）今後のキリスト教は、神なしにやってみかねばならぬと、彼らは宣言する。（佐伯氏）

二

「神の死神学」者たちの主張の一端を知つて、私は感なきを得なかつた。国教ゆえに宗教が形骸化している諸国においても、おそかれ早かれ、新しい時代への眼ざめが要求されているのであろう。形式化し、それゆえに生命力を失つたキリスト教に、一部の自覚せる人びとが満足できる道理はない。

この論稿を読んだとき、《新しい道》につながつて間もない私ではあつたが、《道》の教えの一端は把握していたつもりだから、《世界中が《新しい道》を志向しているな」と感じとつたことであつた。

この論稿は米國だけのキリスト教界をとりあげていられるけれども、精神面の同じ流れは他のキリスト教國にもあるはず。また、キリスト教國におこつていゝことは、他の宗教を國教とする諸地域にも、大なり小なり生じているはず。そして、日本以外のほ

とんとすべての国が「国教」にしばられた諸国であるから、したがって「世界中が……」云々と判断したのである。

「神は死んだ！」とは——キリスト教にしばられ、「宗教からの自由」をもたない国においてであるだけに——すばらしい自覚、眼ざめというほかはない。「キリスト教でいう神の概念は、偶像崇拜の一種」にすぎない」のときは、驚くべき覚醒と賛

えてよいであろう。やはり、人類の心とい

うものは、眼に見えないところでつながりあいつつ（そのつながりは、やがては形あるものとなろうが）、進むべきひとつの方向へ前進しつつあるのである。そして、その行進の先頭に立っているのが、おやかたさまとその《道》であることは、道友諸賢にはおのずから明らかであるにちがいない。天人女史『おやかたさまが最先覚者であり、「宗教からの自由」をもつ日本が、人類のこの覚醒における最先進国となっているのである。

三

「神は死んだ！」という命題はすばらし

い。惜しみなく拍手を送ろう。

ところで、問題は、神を否定したキリスト教がはたしてキリスト教でありうるか？ 追放するのはよいが、その代りに何をもつてこようというのか？ 神は否定してもキリスト教は否定していかないのだから、そこに大きな「？」が残る。

ここで、私たちは、ガツカリさせられてしまっているのである。

「こういう疑問に対して神の死神学者は、われわれは神を信じないが、イエス・キリストを信じる」と答える。神がキリストの体に入ったとき、すでに神は死んだのである。神が愛であるならば、それは、他の人のための人であつた。イエスについていえるのであつて、われわれはそのような福音書のイエスをキリスト信仰の中心と考え、彼に従うのである。神という爽雑物なしにイエスへの服従を説く点では、神の死神学のほうが純粹のキリスト教といえるようである。」

(佐伯氏)

ナーンダノとはかりに、失望させられて

しまう。けつきよくは、キリスト教というワクから出られないなら、おそらくこういう論理づけしかありえないのであろう。神の死を宣言するほどの急進的先覚者に

してなお、このように「国教」にガンジガラメにしばられている。国教がいかに人の思想に強いタガをはめるかの実証であるとともに、世界を導く新しい宗教は、「宗教からの自由」をもつ日本のみにおいて誕生する必然性をもっていることの傍証でもありうるものであろう。

アメリカの神の死神学者たちが、せっかく芽生えたそのすばらしい思想をさらに一歩進めて、「われわれは神を信じないが、天人松木草垣女史を信じる」といえるようになったら、そのときかれらの革命思想は完成するにちがいない。他の人のための人」を二千年もの昔に求める必要はない。今の世にキリスト以上のお人がおわすからである。

四

「神の死神学」は突如としてアメリカに現われたものではなく、これには一人の先駆者がいたそうである。英国ウールウィチ

教区の主教 J・A・T・ロビンソン師で、この人の「神への誠実」という本が三年ほど前からベスト・セラーになり、これが「神の死」思想の先がけをなしたという。佐伯氏によれば、この本は、「神に誠実ならんとして神を求めるほど、外界に実在する人格神としての神の存在を否定しなければならなくなる」という、一種のパラッドックスを示したものである。

このロビンソン師が出した結論がすばらしい！
「神は外にいますのではなく、人間の『深み』に内在し、しかも超越しているのである。」
おぼろげではあるが、その着眼が《新しい道》の絶対者観にかなっているではないか。「人間の『深み』」を《臍》、「超越者」を《天》と表現すれば、かれの思想は完成するわけである。

最高絶対者を「超越的かつ内在的」と二元的に、しかも「二即一」としてとらえてい「ことこそが、《新しい道》の万教に秀でる所以であり、私のような徹底した宗教者ならいであつたものが、この《道》には頭

を下げた根拠も、じつにこここのところにある。たいていの既成宗教は、最高絶対者を、超越的か内在的か、どちらか一方的にしかりなっていない。天の一角とか、西方十萬億土とか、自分からはるか離れたところに絶対者を求め、これを、拝むところから、宗教信仰に特有の空想性、非合理性、依存性、自己喪失、卑屈、阿片性、逃避性……といった悪徳が生まれやすい。自己以外のものを絶対者とするなど、人間の真の自尊心には耐えられないことである。

一方、禪のような内親を旨とする自力行の宗教では、己れを絶対者とし、己れを見つめ、築こうとするわけで、そこに男性的な豪快味があるが、自分だけを問題とし、相手とするとところから、この宗教に特有の歪みが生じてくる。すなわち、他人とのつながりの断たれた、愛に無感覚の、ましてや連帯社会への責任意識などカケラほども持ち合わせない、寒酸枯木ふうの人間がで

きあがりやすい。おやかたさまのいわれる《新しい道》に従って来ているのである。本人がまだそれを自覚していないにすぎない。

山の人になりやすいのである。こういふ人間が、このメカニクな社会で力となりうるわけがない。

《新しい道》では、この二種類の絶対者観が統合されている。「自分を拝め」でありながら、他人をも万物をも等しく拝む。時空をこえた広大無限の《天》に眼を放ちながら、同時に己れの奥へ奥へと分け入って《臍》に達しようとする。しかも、天即臍、超越的絶対者即内在的絶対者、宇宙即自己、他即自、遠心即求心、二即一である。『深遠』というが、かくも深にして速なる宗教、いや思想は、古今東西、かつてどこにも存在しなかった。

（中京支部推進委員）

|| 平井谷本部委員を囲んで ||

青年部 勉強会

出席者 (本部) 平井谷猪市

(兵庫) 山本勝太郎

(大阪) 川上 修

(大阪) 西脇 靖弘

(大阪) 尾崎 勲

(大阪) 藤本 昌弘

(兵庫) 中山 博実

(奈良) 小野 佳二

司会 (大阪) 田中 明

司会 本日はお忙しい中を御出席下さいまして有難うございます。

編集部といたしまして、これから毎号、座談会、対談、又は鼎談という形で、人と人とのやりとりの中でしか求められないものを探ってみよう、鍵をさがしてみよう。そういうことから第一回として、平井谷先生を囲んだ勉強会を企画した訳です。

したがって本日は、比較的つながって日の浅い大阪の青年の方達に集っていたゞきました。幸い兵庫の山本さんも場におみえて

すから出席していただきましたので、基本的な問題を何からでも結構ですからねりあって下さい。

西脇 どんな事が基本的な問題なんですか。(笑)

司会 それもそうですね、では山本さん、貴方がこの場におつながりになった初めの頃の思い、と、最近自覚なさっていることの違いや、その過程などについて一寸お話し願えませんか。

語り合う

人と人との

灯がともる

人と人よに

灯をともしよう

山本 私、この場につながらせていただいて、そう、足かけ六年になりますか、それにしては全くお恥しい次第ですけど……とにかく自分を磨く場だと聞いておりまして、初めの頃は判らないなりに通っていた訳です。段々判ってくるにしたがつて、こういう立派な場は他にないと思えて来ますし、最近では、やはり世の為、国の為に一生懸命やらんらんといい、責任も感じております。

川上 私教職についている者ですが、私の場合、学校教育者という立場でどうしたらよいか判らなくなった。今迄やって来た事が世の中で通らなくなって来たのですね。自分の力では解決出来ない何か世の中にあるんだ。その中で今自分のやっている事がムダである、という事になればどうしたらいいんだろう、という事になって、結局、自分が先に救われたということですね。もちろん自分自身を磨く事が先ですね、自分が浄化されて行く中で、同時に他を浄化して行きたい……

司会 川上さん、その所をもう一寸具体的に云ってみてくださいませんか

輪

川上 具体的に申しますと、今教えている子供達は、これから二十年、三十年先の子供達だと。元来教育というものは永い、そういう見通しの上に立ってなきや駄目だと思ふんですね。ところが現代流の考え方はそんな遠大な目的など受入れない、目先の事だけで一杯なんです。受験だとか、成績だとかあるでしょう、だから強い体に鍛える為に一寸キビシイ体育をやるとシンドクツテ来ない。親もそういう目で見ると、

そうすると同僚達も変な見方になって来る。此方が信念として通そうとすると当然ブツかる訳ですね。それを乗り越えて行こうと思ふと抵抗して行くか、此方がつぶれるかどうかです。それも出来ない。するとですね、吉田松蔭の寺子屋とか塾といったものでなくてもですね。じっくりした師弟関係で教育出来るというのが理想なんです。そういう理想郷があるかないかそれは判らない訳でしょう。それが私の場合には此の場につながってますね、必らず将来そういう形が出来てくると教えられたらですね、大きな希望が出てきますね。そして色々な現代の難関を乗り越えて行く中で得



があると思ふと同時に温かいと云いますか、はぐんで育てるといふ面がありますね。あの様にされたら問題ないと思ひますね。

川上 何か云い足らんと思つとつたんですがその事なんです。教育というのには育てる事が大切なんです。道につながつてお聞きしたんですが、育てるといふ意味が今迄私には理解出来てなかつたんですよ。戦時型というんですか私なんか多少の不便くらい何でもない。ところが今の子供達は全然駄目ですね。そんな事はかり目について本当に人を教え導く立場の者としては大きく欠けていたものがあつた。何かといえは愛情ですね。私の愛情は熱すぎる面ばかりで、むしろ冷たい愛情が必要なんです。それを両立させて行くべきだと思ひます。

来の見通しを持ったこういふ道で、日本の国を造りたいということに落着いて来る、それが僕としてありがたいですね。

山本 今川上さんがキビシク教育すると本人も嫌い、親も賛成しないと仰しやいます。モラロジイだけでは助ける事が出来んのではないかと疑問があつたの

西脇 私此の道につながる迄モラロジイ(道徳科学)に居た訳ですが、其処で三十五年から十年間が日本の運命を決する時だといふ事を聞いています。国が危くなるのは判るのですがモラロジイでは助ける事が出来んのではないかと疑問があつたの

たさまが理として仰しやられる場合はお日さんの理、あるいは朝めしの理と云われるんですね、それは日常生活に成って来た事をどんな事でも喜んでする、思いを変えろというのは此の事を指して仰しやって居られるのですね。

西脇さんが京都へ勤めがありながら此の近くへ引越して来られる、それは何回でも余計帰らしてもらいたい、運びたい、其の

思いがあるから此方へ来る訳でしょう。そして運んで「理」をいただいて、自分よくならうというだけではなくて少しでもおやかたさまのお役にたちたいと思うからお越しになるんでしょう。ところが自然的に信じるというよりね、信じる以上になつていなければ来れない訳ですね。自分の家庭主体、仕事主体に信仰するというんであれば西脇さんの様にわざ／＼此方に住んで、又京都へ仕事をしに行くというようなことは出来ない訳ですね。

とに角、誰でもみたまさん（ヘソ）の方は、おやかたさまを慕っている訳でしょう、そしておやかた様の御垂示をドン／＼いただくのは、こりや夜の理なんですね。

そして、いただいて、もう今年一杯ぐらいでみんな仕上げると仰しやるんですね、今年五月位までに今迄の人を仕上げると仰しやっています。

そうすると今度は、いただいていただきっぱなしではいけない訳で、それではおやかたさまの意に添わん訳で、天に添う、やかたの台になる、これが我々の使命なんですね。

おやかたさまは天の台、世直りの台なんですね、だからと云って我々が世直りをどうこうするとか、どうこう思うという事はこりやしくなくていい事なんです、（それはおやかたさまの使命で、そういう前生因縁なり過去の通り越しなど持っていらいっしょなんです）吾々はおやかたさまから理をいただいて、それを如何にお返しするか、

それを精一杯考えたらいい訳で、その一言に尽きるんですね、今年の宿題も其処にあるんですね。

いただいた理を自分の持味として、自分のものとして日常生活に應用して生かさならんのですけれども——それだけでなくして、より多く、少しでもより多くおやかたさまに、天に報謝する、お返しするという気を皆んなが持つてもらう様になれば、成人したんだと仰しやるんです。

少しでもより多く理を知る、教えていただく、育てていただくという間は、末だおんぶしている訳なんです。おんぶしているだけでは持ち切れない訳で、如何にお返しするか——昨夕の御垂示で、今皆まだ四分々々と仰しやった。四分々々とはシブ／＼、八分位にはなりや、七、八分位此の道の事一生懸命やりやというんですね。すると、それでは生活が出来ないとか家が困るとかすぐに思う訳なんです、そうはならない訳なんです。けれども、一応各々其の人の前生因縁とか、借りとか、過去の通り越しや、経済問題其の他があるから、通る人に



(西脇氏)

よって皆ことごとく様子がちがってくる訳
なんですね。Aの人もBの人も同じという
訳にはいかない訳ですね。つながつてスツ
スツと良くなる人もあれば、前より以上の
苦しみを通らなければならぬ人もある。
ところが本当は、前より以上の苦しみをよ
ろこんで通ってあたり前なんです。そり
やそうでしょう。誰でも借金を返す間は苦
しい訳です。でも返してしまえば先行きは
思わなくていいんだ、と、良くなるに決っ
ているんだ。だから末、生の理とか、調合の
理とか、王冠の理とか今迄世間に無かつた
お蔭、お徳をいただく訳なんです。いや、
と聞いてしまつて、其の通り行なわな
い。ただいてるんだけれども、さて今の自
分にはピンとこない、判らないんですね。
ところが理とは必ずそうなるもんだ、
と謂うんですね。理は必ず成る、天から、
来る自分になれるか、それが今年の一
番大 おやかた様からいただくかぎりは必
らず事な此の道の皆がどうしてもやら
なければ
そうなつてくるんです。

仕事を忙しかつたか何とかな身事情にばかり
とらわれていては成つて来様がない訳です
ね。
ろくでもない心なら、心無うしてや、と最
近は仰しやられてますね。そんなら心と
いうものは無くてもいいかという、一応
無心にならねばならぬんだけれども、そ
れから先はおやかたさまに添う心が必要
な
らな
い
事
な
ん
だ
と
思
い
ま
す
が
、
中
山
さ
ん
何
か
お
考
え
が
あ
り
ま
す
。

そこで最近の御垂示では、心、心、と仰し
やるんです。いくらいたたいてもね、自分
の思いの方が、心がそれに添つていか
ないと思ひます。いくらやろうと思ひ
ましても、心が肉体を左右する訳な
んだから、思ひますが、中山さん何
かお考えが
ありま
す。

中山 昨夕の御垂示にあつたんですが、
自分をブンなぐれという事ですね。今迄の
自分を振り返つてみると、全然まだ自分
が
変
つ
て
な
い
と
い
う
事
で
す
ね
、
そ
れ
で
色
々
考
え
た
ん
で
す
が
、
自
分
を
な
ぐ
る
と
い
う
事
は
自
分
を
捨
て
る
と
い
う
事
に
も
つ
な
が
る
と
思
う
の
で
す
。

小野 自分をなぐるといふ事ね、なげる
ことですね。けど、唯自分を放るといふ事
は難かしい、出来ないんじゃないかと思
ひます。放る作業を拾う作業に変えら
れるんじやないかと。今年には僕は一杯
理を拾つてみようと思ひますね。それが
自分
を
な
げ
た
事
に
な
る
ん
じ
や
な
い
か
と
思
う
ん
。



(尾崎氏)

ですが。

中山 結局、ボンと一ツ跳ぶという事で
すね、一ツ放って、それから拾おうと思
と難しい、放れん訳で、放ったと思っ
つたら、その放った段階一ツ跳び越して
るといふ事ですか。

平井谷 やっぱり順序としてホル、ホル、
ホルという事になる訳ですね。

ホルという事は今迄の其の人なりの欠点も
あればしにくい面もある。それを此の道
理に照してやり変える、その積み重ねが、
掘って掘って掘り下げて行つて、そして
掘らばといふ事になる訳でしょう。順序
としてね。初めからポーンと放つてしま
るはずはない訳ですね。



(田 中 氏)

もあるし、身を放ると云つても無くなる
もあるし、身を放ると云つても無くなる
訳ですね。

いう放るじやなく、この道に捧げ出すとい
う意味ですね。又この道をはっぱせよと
いうのも放る事になるですね。世間に理
を吹くといふ、それもお返しといふ事にな
るんですね。理を吹くには、やっぱり自分
の事を主にしていたのでは吹く事も出来な
い訳で、時間も無いんではないかと思いま
すね。

おやかたさまは、ホレ／＼ホラ／＼、ホーホ
と仰しやるでしょう。最初のホレ、堀らな
ければいけないですね。ところがホレホ
レといふのは皆に何かやろうとされる時で
すね、そしてホラ／＼と受ける方、自分に
当てはめれば、おやかたさまの理を自分に
当てはめるといふこと、そして他に与える
といふこと、理をいただいて他にホラ／＼
とやる、そしてホー／＼と法になる、お蔭
をいただくんですね。よく御垂示聞いて御
覧なさい、必ずホレ／＼ホラ／＼、ホー／＼
といふ順序になつてますよ。

受けとり方は幾何でも受けとれる訳ですが、
放れといふのは自分を無にする事にもなれ
ば、天におまかせするといふことにもなる
訳ですね。自分を無にする、無心になる——無心とか
無我とかいふ事は他の宗教でも云つてい
るところが何処へ行つてもへソ通
りになるといふ事は云つていない。そこな
んですね問題は。おやかたさまはへソ通り
にならされている訳で、そして天から色々教
えられているんですね。へソ通りになれば
堀るとか、放るとか言わなくてもへソが承
知しないんだから問題ない訳ですね。
へソ通りになる迄の間、自分の思いとか怒
とかいふんな物が一杯つまっているから、
無心になれとか、みそぎせよとか色々に其
の人に応じて仰しやるんですね。
へソ通りになるといふのが、人一人救い切
られたといふ証なんですね。そしてへソ通
りになつた人が千人寄れば世の中が救われ
るといふんですね、そういう人を揃えるの
が今年一杯と限定されているのです。
何故限定されているかといふと、おやかた
さまの定命は二年前になくなられているん
ですね。一番初めに「この女、十と四年生
かす」と仰しやつたんですね。その十と四
年といふのは二年前に終つていふんです。

今おやかたさまが生きておられるというの、物事の筋道を、人として通るべき筋道をい
は、皆の「氣」次第によって生き永らえもただいている訳なんです。だから其の筋も
すれば、定命が早くなくなるという事もある。十筋もあれば百筋もある。千筋もあれば、
るんだということなんです。そうするとおやかたさまの様に万々万筋の理を持って
一日も早く我々道の者がへソ通りになるとおられる方もあるんです。けれども人間本
という事が、天への一番大きな報謝になるん
来千筋が本当だと謂うんです。ところが

世の中が今の様な世の中では千筋では人は
救われないんだと謂うんです。それ以上
に細かく、（これを端々の理と云いま
すが）理を元にしてやり替えるというの
は、やはりへソ通りになる順序なんです。
そして、自分の果しをする。そういう道な
んですね此の道は。だから今世直りとか立
替えとか色んな事を仰しやっているけれど
例えば、どんな事があっても、そんな事へ
へのへだと思え、だとか、どんな小さな
事でも喜びなさい、と云われているんです
が、そうしようとして努力しているんです
ね。そして此の場に帰ると又生きる勇氣が出
る訳なんです。それが私の場合天への報謝と
いうことになるんだと思うんですが、それ
でいいのでしょうか。

へソのドン奥にはゴクウというものがある。
ゴクウというのは天に御供えするものなん
だと、そういうものを日本人は誰でも皆ん
な持って生れて来ているんです。

世の中が今の様な世の中では千筋では人は
救われないんだと謂うんです。それ以上
に細かく、（これを端々の理と云いま
すが）理を元にしてやり替えるというの
は、やはりへソ通りになる順序なんです。
そして、自分の果しをする。そういう道な
んですね此の道は。だから今世直りとか立
替えとか色んな事を仰しやっているけれど
例えば、どんな事があっても、そんな事へ
へのへだと思え、だとか、どんな小さな
事でも喜びなさい、と云われているんです
が、そうしようとして努力しているんです
ね。そして此の場に帰ると又生きる勇氣が出
る訳なんです。それが私の場合天への報謝と
いうことになるんだと思うんですが、それ
でいいのでしょうか。

その為には天に色々借りを返すとか、業を
とっていただいたお返しをするとか、様々
の通り方はあっても、へソ通りになり切れ
ば其の通りにやればいい訳で、天への報謝
ということも、それほど深刻に考えなくて
もいいんです。おやかたさまからいただ
いた天の理に反した事を仕様にも出来ない
訳なんですから……へソは天とあい／＼な
んですからね。

世の中が今の様な世の中では千筋では人は
救われないんだと謂うんです。それ以上
に細かく、（これを端々の理と云いま
すが）理を元にしてやり替えるというの
は、やはりへソ通りになる順序なんです。
そして、自分の果しをする。そういう道な
んですね此の道は。だから今世直りとか立
替えとか色んな事を仰しやっているけれど
例えば、どんな事があっても、そんな事へ
へのへだと思え、だとか、どんな小さな
事でも喜びなさい、と云われているんです
が、そうしようとして努力しているんです
ね。そして此の場に帰ると又生きる勇氣が出
る訳なんです。それが私の場合天への報謝と
いうことになるんだと思うんですが、それ
でいいのでしょうか。

そして、理の仕込みを受けるというのは、
この前の御仕入れです。お前へソが胸
迄上ったと、そして時々お前借りる事があ
ると云われたんですが、先ほどからお話お
ないんですからね。貴方の場合つながって

世の中が今の様な世の中では千筋では人は
救われないんだと謂うんです。それ以上
に細かく、（これを端々の理と云いま
すが）理を元にしてやり替えるというの
は、やはりへソ通りになる順序なんです。
そして、自分の果しをする。そういう道な
んですね此の道は。だから今世直りとか立
替えとか色んな事を仰しやっているけれど
例えば、どんな事があっても、そんな事へ
へのへだと思え、だとか、どんな小さな
事でも喜びなさい、と云われているんです
が、そうしようとして努力しているんです
ね。そして此の場に帰ると又生きる勇氣が出
る訳なんです。それが私の場合天への報謝と
いうことになるんだと思うんですが、それ
でいいのでしょうか。

世の中が今の様な世の中では千筋では人は
救われないんだと謂うんです。それ以上
に細かく、（これを端々の理と云いま
すが）理を元にしてやり替えるというの
は、やはりへソ通りになる順序なんです。
そして、自分の果しをする。そういう道な
んですね此の道は。だから今世直りとか立
替えとか色んな事を仰しやっているけれど
例えば、どんな事があっても、そんな事へ
へのへだと思え、だとか、どんな小さな
事でも喜びなさい、と云われているんです
が、そうしようとして努力しているんです
ね。そして此の場に帰ると又生きる勇氣が出
る訳なんです。それが私の場合天への報謝と
いうことになるんだと思うんですが、それ
でいいのでしょうか。



(川上氏)

何年もたっている訳じゃないんだから充分だと思えますよ。けれども、矢張り順序を通って行くのですからね、負って下さい。最近よく三カ月で仕上げると仰しやるでしょう。それはヘソを三カ月で仕上げるとい

う。それは何故かと云いますと、おやかたさまは何十年もかかって千人を作って行くという期間がない訳なんですから……。

そうすると、自分ヘソを仕上げたいのだと云っても、それは手形の様なものなんです。もちろん天から見れば仕上げたいだけいてるんだけれども自分の身上がそれについて行けないですね、そのお返しも出来てない、だから先行きの手形を切っていたらだいたいのと同じ様なものなんです。

だからヘソがチャーンと胸迄来ているといつても自分が其の通り出来上っている訳じゃないんです。川上さんの場合は、今ドン／＼場へ足を運んで、おやかたさまの理を聞いて其の通りになろうという努力、これも天へ報酬する一つの通り道なんです。けれども、天へお返しするというのは、これは根を肥やす事なんです、根の元を肥

やす。

自分を肥やすという事も根を肥やす事だが、元根を肥やさねばならん、元の根を肥やすという事は、おやかたさまの意に添うという事なんです。

意に添わずだけの自分を作る事も一つの順序だけれど、大切なのは、矢張り天に添い切る、という事ですね。

それには過去の自分ではいかん訳で、自分のいき方ではいかんのです。川上さんの場合、自分を仕替える為に云われた事を一生懸命努力するというのも通り道として通らねばならんのです。



(山本氏)

、ならないんです。地元、京阪神の方皆んな此の場を守ってゆけと仰しやるんですね、皆んな場を守るクイなんです。それから其の人／＼の持味を出しあつて場を守る訳です。七〇人とか四〇人とか、あるいは三十五人とか仰しやつた事もあるんです、要は此の場に身を果せとい

うことなんです。この場に日直に来るのも、宿直に来るのも、矢張り一つの順序なんだから……。

何年か先には、どうしても京阪神の方々が自分の仕事だけしては行かないという時が必ず来るんだから、それに備えて今から通っておけという、そういうキメとして日直とか宿直とか出来ている訳なんです。

要は自分というものを作り直して、ヘソのドン奥を出し切ってお返しする。それは決して其の人が損になるとかいう事ではないので、何年か先には皆んなそうならなければならぬんだから、先に通っておけという事なんです。

世の中が、ああなるこうなると全然知らずにくより、先に判っておれば何の心配もいらぬんだと、この道は先行きを教える

と謂う事なんです。

この道本当につながった日々を喜ぶという、ではおやかたさまを安買していることには日々どんな事でも喜ぶという、それには本当のおやかたさまのあり方を知り切る、そのあるという訳ですね。

して、信じ切る事の出来る自分にするというところが、そのしにくい大阪の土地に天はうことですね。色々を受け取り方もありまこの場を置いたんですね、ところの理といすけれど、結局は生れたからにはへソ通りなり切るといのが此の道だという事で

霊界を救い、人を救い、そして国を助けるという天の大きな使命を遂行する為に、ど

司会 有難うございました。最後に、特うしても、この一番しにくい大阪の地に根に地元の人達が自覚していなければならなを下す必要があったのでしよう。

い事について一言お話して下さいませんか。大阪の人はそういう因縁を本当は喜ばねば
平井谷 大阪人はしにくい、それもこんならないのですが、それが反対に逃げよう
なにしにくいとは思わなかったと、おやか／＼という人が多いから、おやかたさまが
たさまは仰しやうていられます。お困りになる訳です。

何がそんなにしにくいかというと「思い」折角大阪の人は浪華の土根性という立派ながしにくい。「思いをポーンと此の場に放持味を持っているのだから、どうしても急り出すんですよ」といつも仰しやられていいで自分やり替える必要があるんですね。

るわけなんです。大阪は商都ですから何そして伊勢は玄関、大阪は日本の門と仰しても一通り自分なりに計算してみる習慣がやられているでしょう。これから大阪がどあるんですね。土地柄でどうも大阪人は何うしても中心にならなくてはならないんです。おやかたさまを囲む要人となさまは理を高く買いやと仰しやられているらなければならぬ、内を固める使命がある訳ですね。折角高い理を聞いても値切つてるんですね。

その使命を本当に自覚したらいいわけです。地元の人には近いんだから、仕入れ仕込まれるの一番有利なんですすからね、毎日でもお戻りなさいと仰しやられてるでしょう。

司会 今日の本当に有難うございました。

※次号は「奉仕」をテーマに予定

(担当 田中明・藤本昌弘)



隨筆

出合い

西 三郎



人と人が出合うということ。考えれば不思議である。日本人一億。その中の一人に出合うということとは、いわば一億分の一しかないめぐり合いということであり、その出合いによってその人々の人世に何らかの転機が芽生えたり、ありうることは御互いよく経験するところである。違うて別れる行

きずりの、それともなき人と人との出合いにすら何らかの縁を感じる心になれば、それはその人に深い人の世の思いやりでもいふべき感情が養われ貯えられているしるしでもあるだろうか。

まこと人の世は人と人との交わりに始まり終るといふべきであり、人としてこの世に生れた身のあり方は人と人との諸問題につきることもいふべきか。尚ぶべきは人とのふれ合いの瞬間におけるその人々の持つべき心根であろう。人間とかくその折々の心のあり方で人と接し、相手の心に思わぬ傷手を与えることがある。与えた本人は案外ケロリとしているということになればその積む業は恐ろしい。ましてや雑言悪語のこの頃の世情を考えると、人との出合いの不可思議を忘れて唯自分独りの世の中と考えてでもいるように思われて仕方がない。

感謝の心を忘れて人に接することとげ／＼しき。権利の主張の

みの言葉。この頃の世情に思う事が多い。

さてかくいう汝自身は如何？と問われ、これはもう頭の上げられぬ事ばかり。まことに到らぬ我身である。六十余年をいかに生きて来たかと問われたら、何とも答えようもない始末……まことに唯々寒心の至りである。

尊とき御縁でお逢いできた尊とき人の御心を、行きすりのお言葉と考え勝ちの我が身の不遜を深く内省して、今日一日を今の一瞬を何とかして尚々生きたいものである。人の世に人として生れて人らしいありかたが少しでも出来たら身所幸わせといふべきであろう。

新しい道シリーズ No. 1

天人出現と天の経綸

|| 末法・末世を救うもの ||

弥勒の下生その以前に「末法の世を救う創造主神(たねの命)人間界に降臨を語り、幽界の大掃除、神界の移動を説き来るべき世の建替え・建直し」の天の時を啓示する等「天と神と人間のつながりを余す処なく叙述する」求道者必読のダイナミックな書だぞ

B6判八五ページ
¥一三〇 円三五

新しい道シリーズ No. 2

究極のものを握め

「方教・方学を統」に導く最高次元の場!!

他力即自力(絶対妙即相对妙)の無限力をもつ統一真理の場を描出し、形而上(「理」・形而下(「法」)の世界における過・現・未にわたる事象の根本を究明し、また主義・思想・倫理・道徳を超絶する「理の元」「新しい道」の展開とその理念を、哲学的考察のもとに論述する。指導者は見逃し得ない人生原理の書だぞ

B6判五〇ページ
¥一〇〇 円三五

人生は

すばらしい

もの

和田篤子



「人生はすばらしいもの、楽しいもの」こんな言葉は、以前の私にはほど遠いものでございましたが、この道につながらせて戴いてからは、「人生はすばらしいもの、楽しいもの」という言葉は、私の為にあるのではないかしらと思うようになりました。草木やお花を見ましても、小鳥のさえずりを耳

にいたしても、小川のせ、らぎ、雨風の音を聞きましても、自然は何事か私にさ、やいているような心地がいたします。又、それにもまして人さまが、日に日に恋しくなりましたのも、遍に、おやかたさまのおかげでございます。

おやかたさまのお言葉の一言一句をたゞありがたく戴くたびに、不思議にも身の内に流れている汚れた血が拭い去られ、清い血がはってまいるような気がいたしてまいります。それにつれて、今までの先案じや取越苦労など、どうして考えていましたか今は不思議でなりません。今日一日を感謝と喜びで暮らし居りますことが、先々の喜びにつながることを身をもって知らせて戴きました。そして今は、人さまのこのみが気になり喜びも悲しみも心から共になり切れる自分を喜んでおります。こうして場におりまして、全国津々浦々からお戻りになる方々とお目

か、れ嬉しくなりません。お帰りになる方々の、道の者としての自信に満ちたお姿を拝見しますと、一層嬉しさがこみ上げてまいります。今の私は、本当に果報者とたゞただ感謝いたしております。

返しをいたしたいと思えます。そして、高一層おやかたさまのお氣持にそわせて戴けますように努力させて戴きたいとお願いいたしております。

ふつ、かな私でございますが、おやかたさまありがとうございます。おやかたさまありがとうございます。お許し下さいませにかえりました。お許し下さいませ

新しい道シリーズ No.3

天意現成の道を行く指導者の一群

五十年後の日本はどお変わるか

宗教がどんなに盛んでも、科学がどれほど進んでも人類の救いはないからば、何によっておしたら救われるか？これに答える本書は、来るべき世の建替え・建直しの時、天（究極のもの）とつながる。一群の指導者によって国が救われる。これを具体的に叙述し、祖国を憂える同願の士よ、来れ来りてその「場」を知れと叫ぶ。

新しい道シリーズ No.4

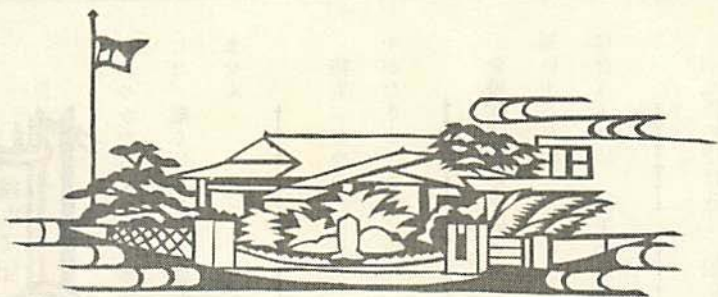
へそそ 談義

生命の神秘と無限力の場を掴め

へそによって産れたんだ。そのへそがあるから、息をして生かされて生きている。生も死も、幸も不幸も、自分の奥のへそによって自分の運命が左右される。へその神秘的機能、その無限力の場をひらくことが、人生必勝の根本法則だ。自分のへそを拝め、と、この書は神の観念と人間概念の是正を主張する。

B6判70ページ
¥1200

B6判60ページ
¥1100



新しい道推進の歌

作詩 松木天村

作曲 塚谷晃弘

A ♩=96

B

なんのいのそら きらめきて しーうたなびく はらわがわか
てんおんしょうかい きなれさけ てんちをむすぶ みちのぼせ

あ あ たれぞしる てんのはを
ほう ていげんり はせさんす

C

まつせをてらす せいじゃあり
われらみちのこ いざともに



おやかたさまから、雑誌の題は戴きました。戴くばかりで、恩返しは仲々出来ません。

特集「おやかたさま」——少しでも「おやかたさま」を世に知らしたい。

金婚式、喜寿を編集室一同、心からお

祝いするために、とにかく記念の式に間に合うように、編集を急ぎました。

羽曳野の空は蒼く、編集室もまた青い。

何かとご意見、ご批評をお待ちします。

室ありて、室なし、鉛筆一本、消ゴム

一つ迄、教務室で拝借しました。若さにものを云わせて、……教務室に大変迷惑をかけました。

なにしろ急いだから、原稿をお願いした方々にも、無理を云いました。

尾崎放哉の「大空のま下、帽子かぶら

ず」——編集室もその意気で天のま下、室に籠らず、編集が偏執にならないように、どしどしご参加を願います。

編集子

あ さ

第1巻 第1号

昭和43年3月1日印刷 価額130円

昭和43年3月17日発行 送料20円

発行人
編集責任者
発行所

矢野 誠 一
小野 佳 二

新しい道センター出版部
大阪府羽曳野市植生野294
TEL 阪南(56)0944
2451

印刷所

東洋プリント株式会社
堺市海山町4丁166
TEL 堺(3)5785-7

松 木 天 村 著

運命を支配するもの

交通安全対策に提言

日本の叡智

人類の黎明に向って

「へそ」学序論

宗教科学哲学を統に導く最高次元の場

負けて勝つ

人生哲学を語る

奇禍、災厄を免がれて絶対事故無しに信に立ち上った二十五件のデータを取録し、これを哲学的・宗教的に究明・解説すると同時に、人間の運命を左右する究極的生命動向の《場》を指摘し、矛盾と混乱の世代に新しいともしびを翳（かざ）す、人生指導書である。振替で左記（センター）へご注文下さい。書店では扱いません。

マルクス、ウエーバー、サルトルを揚棄する、日本民族の《叡智》開顕にもとずく、人類高次の進歩と調和に向って前進する「新しい道」の展開を宣言すると共に、宗教と科学の再生を論述するダイナミックな本書は、出版以来ロングベストセラーとなった。凡そ指導者は見逸し得ないであろう。最寄りの書店でお求め下さい。但し左記へ振替でご注文の場合に限り不要

人間の習性は自然を宗教科学哲学の三つに大きく分裂せしめたために人類みづから破滅の危局を招いた。この大転換期に万教万学を統一する無限界をもつ最高次元の場を把握し宇宙秩序に則る人類真の進歩と調和を齎らす。東洋から起る第二のルネッサンスを叙述する指導者必読の書だ。！

人間の習性は自然を宗教科学哲学の三つに大きく分裂せしめたために人類みづから破滅の危局を招いた。この大転換期に万教万学を統一する無限界をもつ最高次元の場を把握し宇宙秩序に則る人類真の進歩と調和を齎らす。東洋から起る第二のルネッサンスを叙述する指導者必読の書だ。！

B 6 判
¥ 5 0

A 5 判 8 0 頁
¥ 8 0
〒 3 5

B 6 判 3 6 8 頁
¥ 6 8 0
〒 7 0

B 6 判 6 8 頁
普及版 〒 とも
¥ 1 0 0

大阪府藤井寺局私書函4号
振替 大阪 11554番

新しい道センター出版部

※左記へ振替で《前提の四種》ご注文の場合は送料不要
書店では扱いません。



暮らしの向上に 企業の発展に

お近くの《サンワ》を
ご利用ください

〈貯める〉〈使う〉〈借りる〉がこのセットでOK!

サンワ | **ファミリー** 預金 **セット**

普通預金 ネットサービス預金 自由積立預金に、既設のご便宜もセットしました。

まとめて残したいとお考えの方に…

サンワ | **定期預金**



みなさまのお役に立つ

三和銀行

香川
森永